
荒んだ世の中での愉快的学園生活 3rd

高速左フック

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

荒んだ世の中での愉快的学園生活 3rd

【Nコード】

N4304U

【作者名】

高速左フック

【あらすじ】

魔法が使えるようになって、治安が下がった世の中のお話です。

それだけです…。

第一話

レフイーユは、無言のまま資料に目を通していた。

いつもなら、犯罪者のこの概要が書かれたこの手の資料に対して、すぐに終わらせてしまうトコロだが、黙って読みふけるには、それだけこの人物には、個人的な興味と警戒心が入り交じっているからだろう。

おかげで少し厚めの教科書のようなこの資料を読み終えるまで、事件が発生してから二時間が超え深夜に差し掛っていた。

そして、その事に彼女が気付いたのには、自身の携帯が鳴ったからである。

「私だ…。

セルフイ、どうだった？」

「ふん、まったく警察関係者も、もっと時間帯を考えて搬送してほしいわね」

そう悪態をつくので、まだ元気があるかと姉ながらの思ったのだろう。

いつも通り『ふっ』としながらレフイーユは答えた。

「相手は大物の『指名手配犯』だ、マスコミや外部の妨害、および周辺住民へ及ぶ被害を避けたかったのだろう。」

現に輸送車は襲われて、お前の町で妨害が起こった。

夜も静まり返っていた、この時を選んで周辺住民へ被害が及ばなかったのは、警察の判断は正しいと思ってやれ」

「だけど、そのおかげでまた襲われるのを避けて、行き先の近く
の白鳳学園、つまり姉さんのトコロに『あれ』がやってくる事にな
ったのよ？」

「ふっ、こうなっては仕方がないさ。

指名手配犯をこちらで預かるというのは、勝手が違うかもしれないが私は自分の使命を果たすだけだ。

だが、セルフイ、悪いが…」

「わかってる。

今、臨時転校の手続きをしている最中、それで二校同時の三人組
みの交代制で…。

大体、24時間の監視しようって考えてるけど？」

「妥当だな」

意外に早い妹の対応に、感心しながら笑みを浮かべているだが、
セルフイはため息をついていた。

「でもコレで役者が揃ってしまったわ」

「ふっ、どういう事だ？」

「姉さんの町にはもう一人、指名手配犯がいるじゃない？」

「ああ、『漆黒』のか…。」

だが相手を知ってる分、私からしてみれば、この男の方が恐ろしく感じるな」

「それは姉さんや私が東方術者だからじゃないの？」

「それもあるかも知れない、文字通り人を100人殺めた男なのだからな」

そう言って、机の上に置かれた資料が目についたからか、先ほどから、このような会話をしていたからか、30代後半の見立て通りの顔つきをした男の写真を見ながら呟いた。

「シドウ・タカムラ…か…」

そして、彼にもある特徴がある。

シュウジ・アラバが『漆黒の魔道士』と呼ばれるように、彼にも名前が付いていたのを妹は答えた。

「通称、痛みを与える者…」

「スーパーパーペイン…か…」

そんな空気の中、レフィューの部屋がノックされる。

それが何となく、警察関係者がやって来たのがわかったのは言うまでもない。

第二話

「ふんふふーん♪ふんふふふーん♪鈴がっ鳴る♪」

そうクリスマスソングを口ずさみながら、イワト・ゲンゾウは張り切って自分の任せられた力仕事をこなしていた。

別に今はクリスマスという訳ではない。

ただ、この男はイベント好きでそれでテンションが上がれば、何かしら季節柄の鼻歌を歌うような男なのだ。

「ゲンゾウ、その机はもう必要ないから、隣の教室に持って行ってくれ」

もう一人、イワトと同じくらいの大柄な体格の男がイワトを振り向かせた。

名前はガトウ・レオナという。

先ほど『男』と言ったとおり、名前にレオナと付いているこの大男は、イワトがある程度運んで来た、

いつも使ってる机よりワンサイズ、小さい机や椅子を大小大小と言った感じに交互に並べ立てていると、他の男子がレフィューに寄ってきた。

「これなら初等部の児童が、治安学習の授業中に質問されても隣に私達がいるから即座に対応出来ると、このジング…」

「ふむ、だが、やはりこれでは授業の後で、通行の邪魔になるよ
うだ。

お前には悪いが、右側に私達が固まって、もう片方に初等部が固
まるようにしてくれないか？

出来れば意見交換の際の話し合った、生きた意見が聞きたいので
な」

そう言うときっきの男子生徒まるで、おだてながらまるで自分が
考えたかのように他の生徒に命令を出して、彼女の近くを離れない
でいた。

「……」

しかし今、彼女は機嫌が悪いのもあり、無言で彼女の元々細い目
がさらに鋭くして突き刺すので、普段しつこいこの男もさすがに理
解したのだろう。

『お前も働け』と…。

そそくさと作業に移って行くのを見てみると、レフィーユは次に
窓拭きをしている男、シュウジ・アラバに眼をやった。

「よっこいしょ」

彼にはもう1つの『顔』がある。

だが、その『顔』に似合わない声をあげて窓のサンから着地する

と機嫌悪いレフィューと目があうと。

それは拭き作業の進行方向のままさっさと逃げて行った。

「…何故、逃げる？」

「例え女性でも、機嫌の悪い人に近寄って痛い目を見るくらいなら逃げますよ。」

私の方こそ言わせてもらいますが、指名手配犯を預かっているというのに、初等部の合同授業を行うなんて随分と余裕があると思いますか？」

「仕方ないだろう。」

事態が事態だからな、最初は私も断った。

だが『支援者』がうるさくてな。

このまま断り続けたら、支援を止めるそうだ。

私としては言わせておけと言いたかっただが…な…」

レフィューは、その理由をかみ締めるように黙った。

その態度が彼女自身、このイベントには乗り気だった事を思い出させた。

では他に理由があるのかと『どうしました？』と聞くと理由は頷けるモノだった。

「実はその支援者の子が、初等部にいてな。」

いや、これは理由にならんな。

まあ、その親が…」

「親が…?」

「浴に言うモンスターペアレントなんだ」

第三話

「モンスターペアレント、ですけど事情が事情だと思いますが？」

「それはな、校長も事情くらい話したさ、だが、私なりに調べてみてわかったが、どうも今回、初等部側は授業参観も兼ねているらしくてな。」

校長にこう言ってきたそうだ。

『私達はワザワザ、ホテルの予約までして今日に望んだ。』

親が子供の成長を見にやってきて何が悪い』

そう言って、聞かなかっただそうだ」

似せる気の無いモノマネをするのが、よほどレフィューがそのモンスターに呆れを見せているのが見て取れ、少し自分の中に『モンスターペアレント』というのをよく知らない性か。

「随分と理不尽ですね」

と少し冗談混じりにレフィューに茶化しに掛かったが、彼女は窓を開けて視線で『アレを見ろ』と言った。

「正味20分程度で終わる話が、2時間くらい延ばされた結果が『アレ』だ」

「う、うわあ…テツヤさん…」

どこにでもいそうな風貌の白鳳学園のテツヤ校長は黙ったまま、グラウンドを一人静かに眺めていた。

「や、やめませんよね？」

「何故、お前や他のみんなは自分達の校長を名指しで呼ぶのかはわからんが…。

ふっ、決まった事は仕方がないさ。

年下の人間と年上の私達が話したり接する事は人格形成の大事な事だというのも、理解をしている。

私は全力を尽くすだけだ」

『なるほど』と理解をする中、時間が経って少し疑問に思った事があった。

「それでどうして私がこんな役をしなければならないのですかね？」

ガラガラと食事を載せた手押し車の独特の金属音が鳴る中、どうして自分が食事係になっているのかレフィューに聞いてみた。

「すまない、指名手配犯の食事係など誰もやりたがらなかったものもあるが、正直、させる気もなかった」

「それで私に？」

「適任といえば、聞こえは良いかもしれないが…、お前は『指名手配犯』というのがどうなのか知っているのは、お前と私だけだからな」

なんとなく自分の事を棚に上げた気になったのか、レフィューは少し顔を曇らせたまま学園内にある留置所の検問と一緒に通ったが、自分も『漆黒の魔道士』として指名手配犯を何回か見たことがあった。

快楽目的で人を傷つけるモノ、犯行に及ぶモノ、中には自分のような人間もいたが、ただ言えた事は…。

「スーパーペインは『事実』ですから、仕方ありませんか…」

「……」

レフィューは何も言わないまま、ゆっくりと自分の東方術でサーベルを作り出す。

指名手配犯を前にする時は、常に武装しないとイケないのが、この時代のルールでもあるが自然に車を押す手に力が入った。

「あら、アンタが？」

レフィューが二人の番に自分の入る事情を説明する中、もう一人番を勤めていた、レフィューの妹、セルフイもすぐにハルバートで対応出来るような自分に話しかけていた。

そして、『ソレ』と至近距離になった。

今までどこにいたのかわかるような色気の無い服に、東方術が機能しないように玉のような手袋をした男が自分を見て言った。

「…セルフイとレフイーユはわかるが、何者だ？」

「ふん、アンタが気にする必要ないわ」

さらに手錠を光らせたが、セルフイは『さっさと用意しなさい』と視線を送った。

「またスープにお粥か久々の食事とはいえ、こんなベーコンじゃなくて厚めの肉が食べてえよ」

用意する最中、セルフイがペインの後ろに立つのは、何かしたら容赦なく攻撃をするようにするためだった。

それを見て、玉のようなグローブに空いた小さな穴にスプーンを突き刺すと自然とペインと至近距離になったが、構わず離れるとペインはスプーンを使って器用に食べていた。

「そんなに人の食事が珍しいか？」

セルフイは何も言わないまま、ハルバートの重量を利用して伸し掛かろうとするが、いつもの態度で答えた。

「随分と器用にスプーンを使う人だなと思ったモノですからね」

「まあ、手がこんなだからな。様は慣れだ」

セルフイはいつもの態度に呆れながら答えた。

「アンタね、何も言わず聞かずはルールよ。」

さっさと…」

途中で止めたのはレフィーユだったので、ペインは興味深そうに自分を観察して答えた。

「ほう、珍しい人物が止めに入った。レフィーユ、こいつは？」

「ふっ、そこはお前が知る必要は無い。ただの食事係だ」

「いや、コイツは中々、度胸が据わっている。」

一目見てわかった。

名前を知った所で、どうにもならん事くらいはお前も知っている
だろ。

それとも何だ、俺はコイツを『食事係』と呼べばいいのか？」

そう言って、ペインは自分をじっと見て名前を聞いてきた。

「じゃあ、漆黒の魔道士をお願いします」

あっさりと答えるので、よほどタイミングが良かったのか悪かったのかセルフィはさらに呆れていた。

「ふん、アンタの場合は『度胸がある』じゃなくて『タチが悪い』
の間違いじゃないの？」

すると指名手配犯のスーパーペインは笑っていた。

第四話

「昔、あの魔法使いが自分の名前を語ったり、偽者は絶対に許さないと聞いたことがあるのだが？」

「よく知ってますね？」

「まあな、世界唯一の西方術『闇』を使いこなす変人だろ？」

「へ、変人…」

「ふっ」

「どうした、二人して、随分と明暗を分けた顔をして？」

「い、いえ何でもありません、それで出会った事は？」

「いや、無え。」

噂だけ聞いたただけだ、お前さんにはわからねえだろうが、俺にもスーパーペイン（こんな名前）が付いているからな。

名前の付いているもん同士が下手に関わったら、ロクな目に合わんだろう？」

「という事は『何も知らない』という事ですか？」

「俺は、こんな状態だ、会いに行けると思ってたのか？」

どうも自分の事は、知らないらしく少し安心しているとセルフィが言った。

「随分、気になる言い方ね。

あの魔法使いがどうしたっていうのよ？」

セルフィもどうも自分の事に気付いていない。

だが、こうなると誤魔化さないといけないので、少し前に起こった事を思い出すように答えた。

「ペインさんがやってくる少し前くらいですかね。

市内を歩いていますと、偶然、その魔道士に出会ったのですよ」

「何だと？」

レフィューが驚くように聞いてきたが彼女は事情を知っているの
で、『変人』と言われた辺りから少し笑って聞いていた。

しかしペインはソレに気づく事なく聞いてきた。

「なんだ、ヤツはあんな目立つ法衣を被って市内を出歩いている
ってのか？」

「それは偶然、路地裏で出会いましたよ。

とにかくその時なんですが、貴方の仲間と名乗る人達が、貴方を
救出するのに協力してほしいと協力を求めてきたらしいのですよ」

「まあ、そんなトコロか。んで、闇のヤツは何と？」

「あまりにもしつこいから、協力するそうです」

「随分、押しに弱い指名手配犯な事だ」

皮肉を込めながらペインが食事を少し残したが『もういい』と言ったので、食器を手押し車の中に収めるとレフィーユに言った。

「それではこれで…」

「ふっ、すまない、こういう役を押し付けて」

「おかまいなく、いい経験でしたよ」

そう言って、立ち去るとペインはため息をついた。

「…お前の彼氏なかなかやるじゃねえか」

「ふっ、なかなか評価されないのが困り種だが、あの男にはいつも助けられてばかりさ」

「…どこがよ、食事係を買って出たのはよかったけど、アンタの仲間と魔法使いが手を組んだって言う。

もう一つやっかい事が増えたじゃないの」

「だが心理的に有利になったのは、お前らの方だろうってのにか？」

ペインが感心するようにそんな事を言うのでセルフィは、どういう事か聞こうとしたがレフィーユが代わりに聞いてきた。

「セルフィ、魔道士が今回の事に関わる気が『あるのなら』どうする？」

「姉さん、今がその状況じゃないの？」

「ふっ、良いから答えてみる」

「そんなのこう言った警備だけじゃなくて、輸送の際に、いつ魔法使いが襲い掛かってきてもいいような体制を取るだけよ。」

それは私達がここに住んでいる限り、配備は常に、この想定を元にするのが基本じゃない」

「ふっ、基本か…。」

では『関わる気なんか毛頭なく』、この男を搬送していた時、彼が近くに目撃した。

お前は どうする？」

「ふん、そんなシチュエーションあるのかしら。」

でも、関わる気がないなら、敵を増やしたくないわよ。

…あっ」

「ふっ、さすがに気付いたようだな。これでヤツが『関わる可能性ある』ではなく『関わる』という事になった。

これだけでも私達の周りの心境はかなり違うだろう」

「それだけじゃねえ、俺の部下はおそらく、これを『カード』として使ってくるだろう。

それこそ『驚け』とな。

しかし、驚かないのはお前達。

そこにつけ込まれる『隙間』に、でかく無い事を祈るしかなくな
った」

「ふん、あの人にそんな器用な事が出来ると思えないわ」

「ふっ、それはあの男は最初の『関わるか、関わらないか』だけを狙って言っただけさ」

まるで息の合うように、セルフイに言うのでレフイーユは言った。

「ふっ、だが、さすが若い頃、治安部のリーダーを務めていただけはあるな」

それに驚くのはセルフイだけじゃなく、その男、スーパーペインは黙っていた。

第五話

そして、次の日、その初等部の国立大村学園おおむらとの合同授業の日はやってきた。

グラウンドで校長の説明を終えて教室に戻ると、いろいろと不安な事もあったが、周囲もやはり楽しみにしていたのだろう。

自然と明るい雰囲気になっていた。

「どんなヤツが来るんかのう？」

テンションが上がったイワトが楽しそうに言うのと、そこには前にレフィューが指示したとおり自分達のクラスのちょうど半数の机を減らした状態で出来たスペースに、1サイズ小さい机や椅子が並べられている。

他の半数は使われていない別教室で同じような風景を見ているのだろうが、やはり気になるのは自分の周囲には治安部員が多いのである。

「誰かの陰謀が見え隠れしてますね…」

「ふっ、陰謀とは聞き捨てにならないな。」

私としては頭の良い連中に、体力班と分けたつもりなんだが？」

レフィューは近くにやって来て、その細い腰に手を当てて聞いてきた。どうやら悪くも思ってもないらしい。

「それで本音は？」

そう聞こうとした時、周囲が静かになった。

最初は初等部の生徒達が来たのだろうと思って、出来た静寂の中に視線を向けると明らかに初等部とは言えない人達が先生の誘導のままに教室に入ってきたので、今回の事情を知っている分、質問の内容が少し変わっていた。

「誰がモンスターなんですか？」

「先頭をきっている、アイツだ」

行列の最後尾を見渡すようにして、先頭を見ると、メガネに厚化粧、PTA代表という表現が似合うくらいの保護者が仁王立ちしていた。

しかもそちらもこつちを『じっ』と見ているが見ない振りをしていると、レフィーユが言った。

「ミュンヒハウゼン・ミチコ。」

最近になって治安部の活動の多額の支援者として、名をはせた人物だ」

「支援者…という事は、ウチの学園も彼女の支援を？」

「さすがに気付いたか、おそらく断りきれない理由もそこにあるとは私も感じている。」

だが大村学園^{あつち}ほどではないだろうと思っている」

「子供がいるから、融資はそちらに偏ると?」

「ふっ、あちらでは学園行事も彼女に仕切られて、噂では学園長より権限は強いらしいぞ?」

「そんな株式な…」

呆れながらだろうが、その証拠とばかりにレフィーユはミチコに視線を合わせに行くとミチコは鼻で笑い、隣の保護者と話を始め視線がさらに降り注いできた。

「…つまり、この怪物たちの対策として私があてがわれたのですか?」

「期待はしているが?」

そう言われて、レフィーユを見ている、厚化粧な視線達を近くで味わいながら素直に感想を言った。

「レフィーユさん、言っておきますけど『何も出来ません』よ?」

「ふっ、そんな事はわかってる。」

だが…」

途中でチャイムが鳴り、続きを聞こうとしたがレフィーユは先に席に着くと自分の席と隣という事に気が付いた。

どうやら、これも陰謀だと思うと。

「これくらいは構わんだろう？」

そう自分の思考を読みながら、担任が先に入って来た。

「ええ…、皆さんいよいよ

楽しみにしていた。

合同授業の日を迎えたワケ…なんです…が…」

担任の調子がいつもと違うので、やはりこの外野が気になるのと思っていた。

そう最初は…。

「ええ…と、まあ…確か…合同授業は生徒が進行をする事にあるのよねえ…。」

せ、先生の出来る事は、生徒を入れるまで…ね。

レフィーユさん、後はお願いしますね」

笑顔を引きつらせ、責任転嫁という学校の先生あるまじき行為をするほど…。

「レフィーユさん、ホントあとお願い…ね…」

ど、どうぞ」

招かれて、全てはこの第一声が物語っていた。

「はい、失礼します!!」

それは大きな声だった。

先ほどの台詞を大きく出来るのなら三行大きく書きたいくらいに、しかし、まだ驚くまでには至らない。

『大きな声で返事をしなさい』と初等部の先生が教えたのだろうと、何かしら初々しさがあったからだ。

その証拠に女子の中にもつい笑ってしまうほど、自分の心境もそれと同じだとも思ってもいい。

しかし、その女子は次の瞬間に、自分と同じように引きつっていた…。

一糸乱れず足を伸ばしてまま行進して入ってくる子供達は、あまりにも異様だった。

「お兄さん、お姉さん、本日はよろしくします」

雰囲気似てるとかそんな理由ではないが、この子がおそらくモンスターの子だと直感できた。

第六話

ザ、ザザ、ザッ！！

一人でそんな足音を響かせるので、担任の調子の悪きがおそらくこれが原因かと理解をするより啞然とする方に力を働かせている年上達を尻目に、他の生徒達が入ってくるので『もしかして』と不安になっていた。

だが残りは足並みを揃えて…というワケでなく、初等部らしく幼さも残る不安と興味の入り混じった視線をキョロキョロとしていたので、それはすぐに解消された。

後で彼の名前を聞いたが、ミュンヒハウゼン・ロウファというらしい。

整列し終えたのを見て取れたのか、レフィーユは未だに啞然とした空気を取り払うように言った。

「君たちにとって二週間という短い間だが…」

「いいえ、貴重なお時間です！！」

初めてではないが進行慣れしたレフィーユの口調を遮るように他の生徒も一斉に声をあげた。

これにはさすがにレフィーユも目を細める。

おそらくあの母親の指示だろうと、視線を向きたいのを抑えるよ

うに目を閉じて、息を吐いてレフイーユは続ける。

「…その間だが、普段キミ達が学びでは得られない、貴重な経験に出会って欲しい。

そして、今後の参考になるならば、先輩達の遠慮なくその技能を盗んで…」

「いいえ、学ばせてもらいます!!」

再度、レフイーユが黙る、彼女は気付いているのだろうか、ここで自分はようやく彼だけ目立つように並んでいたのがわかった、おそらくそういう演出なのだろう。

そういう風に仕向けたのだ。

「…では、これより学園案内代わりのオリエンテーリングを開始しよう」

こうなるとレフイーユが彼を担当しなければならないという空気になるのは不自然というより、自然な流れとなる。

そして、今、一人の生徒を学園内を案内していた。

「それでここからでも学園の外には出られますが、ここは非常時のみですから出るときは、さっき言った正面玄関から出て行ってくださいね」

そう言って、一人の少年、アイサカ・ミクモに声をかけた。

「は、ははは、はい」

緊張が入り混じった上ずった声で、頷いてくれるのに『ああ、この子はまともだ』と安心してはいた。

「ミクモさん、そんなに緊張せずに、いくら年上といっても、普段、どおりに接してもかまいませんよ？」

自分で言っておきながらではあるが無理だろうと思った。

相手は初等部の5年生、2つ下までの後輩ではないのだ。

昔、初等部の6年だった時、新1年生を学園案内をした時に感じた世代のズレが、さらに中等部もまたいでいるせいか大きく感じていた。

そして、普段魔道士としての接し方をするわけにはいかないのか何とか話題を作ろうと話題を探すと、どうしてもこうなってしまう。

「どうでした、レフイーユさんは？」

当然、ミクモは困惑する、だが自分が気を使ったのがわかったのか緊張しながら。

「き、厳しそうな人だと思いました。

ち、治安部をまとめているから、し、仕方がない事なんだろうと、そ、そう感じたのですが…。

そ、それでもどこか優しい人なんだって、お、思えました。

ロウファと違って…」

年頃らしい人の他人に対しての話し方をしたが、ここで気になった事がある。

「ロウファ、随分と親身にひさしく聞こえましたが、友達なのですか？」

「え、ええ、まあ、ロウファはそうは思っていないかもしれないけど…」

「彼、随分と面白い人ですね？」

「す、すいません、あ、あれは…」

「氣にしませんよ。」

先生には逆らえないのはよくある事じゃないですか？」

ホントは先生ではなく、両親だと言うのは知っていたが、ここまではそう言っておいていた。

今、ここでは指名手配犯を預かっているのは知られてはならない。

そうレフィューに指示されていたのもあったが、念には念を入れていた。その証拠にその先の留置場を紹介しないようそのまま通過しながら聞いてみた。

「ですけど、あの対面はとにかく、名前を言うタイミングで黙っ

たのも見物でしたよ」

慌てるミクモを見て、つい笑ってしまった。

理由はこうだ。

レフィーユに名前を聞かれたら、その人物は彼女が気に入っている。

そう聞いた事があるが、ミクモは何か不思議そうな顔をして聞いてきた。

「で、でも、あの時、ロウファ、自分から言ったのはどうしてなんだろう？」

「ああ、それが、この噂がその噂たる由縁なのでしょね」

「ゆ、由縁…？」

「その噂が本当ならば、名前を聞かせようという流れを作ってしまえば、簡単な事だと『誰でも』思ったのでしょね。

おそらく『レフィーユが自分の名前を名乗るまで、お前の名前を言うな』とでも指示されたのでしょね」

「で、でもどうして…」

「そこが彼女の凄いところなのですよ。

レフィーユさんに睨まれた…いえ、見つめられた人って、とても

緊張するらしいですよ。

それこそ、初対面であればあるほど。

ですから彼女が自分の名前を言う前に、緊張が手伝って、ロウフアが言ってしまったのでしょね。

でもただが噂ですよ」

「う、噂…」

「貴方は自己紹介で評価が決まるのは、いかなものだと思いますか？」

「そ、そうですね」

そういうながらお互い笑っていると、ミクモは聞いてきた。

「あ、あの…」

「どうしました？」

「こ、ここの紹介が、まだなんですけど？」

誤魔化すつもりで留置場への道は避けたつもりだが、そこを聞いてきたのだ。

「ここは職員以外立ち入り禁止なんで、入らないでくださいね」
元々、イワトや、レフイーユに話し合って決めた言い訳をする。

「あ、あの、もう一つよろしいでしょうか」

「…なんでしょうか？」

その時、少しばかり嫌な予感がしたが、残念ながら当たっていた。

「こ、この学園で指名手配犯を預かっていると聞いたのですけど、ホ、ホントなんですか？」

スーパーパーペインを預かっている事が安易に漏れていたのだ。

第七話

「おう、アラバカ」

放課後、一人残った教室で携帯を掛けようとする、教室に入ってきたレオナが誰もいないと思っていたのだろうか驚きながら聞いてきた。

「誰もいない教室で、夕暮れ時に一人、どこに電話を掛けようとしてたんだ？」

「茶化さないでくださいよ」

笑いながら友達独特の携帯ディスプレイを覗き込もうとする動作を一定ある程度していると、レオナは元々、見る気など無かったのだろう。

「まあ、早く帰れよ」

治安部員らしく、そう言ってさっさと出て行った。しかし、悪く言うつもりはないがおかげで自分の中の緊張が解けた。

そして、良い表現で解けたのではない、何かをしようとする時に、必要な緊張が解けてしまったのだ。

携帯を見つめ、今から緊張し直そうと、さっさと教室を出てグラウンドへと向かうと、そこへ一人すれ違った事もあり、改めて誰もいないのかを確認して携帯に連絡を入れた。

「もしもし、私です」

相手の返答を聞きながら、その声は濁っている。

「すいませんね、一応、用心深く着信拒否してましたからね」

自分の口をマスクのように、黒い：物質とは違う何か異質な『闇』が覆っているからだ。

「その通りですよ、私は貴方達を信用してません。

そもそも命令されるのは、好きではございませんのでね」

するとさつきすれ違ったレフィューが、どこから持ち出したのか携帯用のイヤホンを取り出して自分が話している最中だというのに携帯に取り付けて聞いてくる。

それに気付かないのは聞き手と言うべきか…。

「それはコッチの台詞ですよ。

そもそも私は部外者で、スーパーペインとは何ら関係なんかあるワケがないのですから、協力する話も無かった事にしてもいいのですよ？」

レフィューがふっと笑いながら、このスーパーペインの部下との会話を聞いていた。

「こっちは輸送の話は、まだ上がってないそうです。

そっちは…?」

その返答にレフィーユは、ため息をつく。

「無理でしょうね、レフィーユさんにしても、そこは読んでいるでしょう。」

まあ、他の手を考えましょう。

では何かあったら、また、連絡しますね」

返答をまたずに、一方的に切ると壁に身体を預けて、感心するようにレフィーユは微笑んでいた。

「隣は何を聞く人ぞ…か…」

「あまり良い結果ではありませんがね」

「いや、仕方ない事だ。」

学園行事など、今や、連絡を入れれば簡単に手に入る。

その状態で、こんな強行をしたんだ。バレるのも時間の問題だったのだろう。

いや、最悪はまだ続いていると言ったほうがいいか…」

すると視線を送るようにレフィーユは視線を送った。

すると明らかに怒り心頭しているPTA軍団がこちらにやって来

て、その真ん中に立ったミチコが突然、言ってきた。

「これは一体どういう事ザマス!？」

日程表を振り回しているためなのか何に対して怒っているのか知っているのだろう。

レフィューは保護者達の怒声を、まるでそよ風にも吹かれたかのように答えた

「ふっ、それは我々、治安部が考えて作り上げた日程のようだが？」

「どうして夜のパトロールが抜けているのザマス？」

「何を言うかと思えば、初等部の子供にそんな危険なマネをさせていいと思っているのか？」

「ロウファちゃんは、そのために訓練を積んだのザマス」

「そうよ、ウチのシンヤちゃんもよ」

「私のネムは、刀剣術3級よ」

各々が自分の子供自慢が始まり、辺りがうるさくなる中、ミチコは嫌味たっぷりに答えた。

「まあ、皆さん、年頃だから、そんな男に現を抜かすのはわかるザマスけど」

『おほほ』と上品ぶった保護者全員の笑うが、さすがに言い過ぎだと思い。

「では、貴女達はそんなに子供が大切ではないと言いたいのですか…」

自然と自分の声が出ていた。

第八話

「し、心配してますわ、何を大げさな…」

珍しくアラバは怒っていた。

彼は声を荒げるでも無く、ただ『じっ』と、いつもの漆黒の魔道士とは違う凄みに、保護者は明らかにたじろいでいた。

「大怪我してからでは遅いから、レフィーユさんはこの日程を考えたのですが？」

「そんな事を言っても貴方、ネムは刀剣術3級と言わなかったかしら？」

「レフィーユさんは有段資格を持っています。」

ですが、それでも遅れを取る事も、時にはありますが3級ではどうなりますかね？」

普段、怒る事はない男が怒る、それは珍しい光景ではあった。

他から見れば微笑ましさくらい感じる事だ。

しかし、理由を知ってる身としては、笑えなかった。

彼は『事件』で両親を失っているのだ。

治安が下がった日常というのは、それが茶飯事なのだ。

「知った口を挟まないでほしいザマス!!」

そして、そんな日常の連続で、感傷すら薄れたミチコはそう一喝していた。

「貴方がどれだけやるのかはご存じありませんが、ロウファちゃんは治安部のリーダーを目指しているのザマスよ。

私だけじゃないの、私達は一流のトレーナーに訓練を積ませて、実戦に出ても通用するレベルだとも言われているのザマス。

いいでしょう、明日の武道の時間のロウファちゃんを見なさい、きつと成果をあげてくれるザマス」

そう言って、自らが始めた会話を勝手に話を終わらせて行ってしまった。

そんな事があった彼の部屋にて、私の持ってきた資料とにらめっこをしている彼に聞いてみた。

「しかし解せんな、ロウファを治安部のリーダーにするべく仕立て上げようとして、今回の事に及んでいると言うなら、普段安全な成果を上げればそれだけで十分なはずだ。

こんな危険な時期に行う必要があるのか？」

「正確にはわかりませんよ。

ですけど『親の抱えた理由』の延長線上が、今回の事態を招いて

いるのかと私は勝手に思ってますがね」

「抱えた理由？」

「例えば親が…。」

『私は治安部のリーダーになれなかった。だから、その子供に果たせなかった夢を託そう』

と考えていたら今回の強行も頷けるモノだと思いますよ。

近年、こんな理由で両親が傷害沙汰、脅迫沙汰を起こすような事件が多発してますし、治安部のリーダーという役職は、将来にも役立ちますからね。

そこに貴女が『お墨付き』となれば…」

「…だからと言って、自分の子供にも選ぶ権利くらいあるはずだ。

それに今回の事で成果を上げたところ、訓練を積んでも、彼等が今後、治安部としてやっていくのか、結局、選ぶのは親ではないだろう？」

「それが一般的な答えなのでしょうね…」

そう言って、PCの電源にスイッチを入れるので、私の言った答えはおそらく『甘い』と言いたいのだろうかと思い、自然と眉間にシワがよってしまったが彼は気にする事無く聞いてきた。

「レフイーユさん、プロのスポーツ選手の作り方って知ってます

「？」

「ふっ、そんなモノがあったなら、こんな事態も起きないと思うがな」

するとまた彼はネットを開き検索を始めて、答えを言った。

「この本の通りに、やれば出来るのが、最近、わかって来たらしいのですよ」

PCには、ある本が映っていた。

そして、あまりにも簡単に反論しやすい答えだった。

その本は古くから：いや、現代に至るまで、執筆をし続けられている本でもあり、思わずこの男の言っている事は間違いではないのかと思った。

「プロゴルファー、ロシナンテの父、カリウスが語る育成術…。

こんな事を真似て、プロ選手など出来るワケがないだろう」

「まあ、この場合はプロゴルファーですが、レフイーユさん。

どうして、こんな事を真似て『プロスポーツ選手が出来ない』と思うのですか？」

「ふっ、それこそ無理に決まってるからだ。

この手の本に書かれているのは、ようやく物を考えるようになった

た年頃の自分の子供にサッカーのリフティングを教え込ませたり、野球のキャッチボールをさせるなど。

本の中には、親の異常さすら感じさせるモノもあったではないか、大体、この通りにやれば、それこそ、その子だって反発するだろう？」

「生活環境によっては、子供が全員、反発する事はありませんよ。

『反発』する感情自体、今の時代、教育で、押さえ込む事が出来ますからね。

そして、その反発する感情を失った子供は、どんな親のやりすぎでも、それが『普通』だと思ってやってしまう傾向はあるらしいのですよ。

子供であればあるほど…。

海外では、こんな子供を育成してプロの選手を作る学校は普通にあるらしいですよ」

思わず黙ってしまった、そんな中、彼はこうも言った。

「この本だけではないですが、この手の共通点は『信じ込ませる事』あります。

親なら子供は言う事を聞くでしょう。

ましてや今回、親達が『この子を将来、治安部で活躍させたい』

なんて、そんな共通の思考を持っています。

その子供は間違いに気づく事なんて不可能でしょうね」

『不可能に近い』ではなく『不可能』と言い切るので、彼は今回の事を私以上に危うく思っているのがわかった。

彼は一枚の資料を差し出す。

それはロウファの資料ではある。

学業は申し分ない、欠席もなし、刀剣術2級、捕縛術3級。

ここまでは当時の私と近いモノがある。

だが、他にも習い事をしているらしく…。

私が趣味でやっている事にも資格を持っていた。

おかげで華々しく、記載欄を埋め尽くした資格は私の目には、痛々しく思えた。

第九話

「これより、パトロールを行う…」

次の日、レフィューは昼間のパトロールに赴くべく、校門前にて整列した初等部の生徒達に説明をいつもの調子で説明するが、そうもいかない。

「はい!!」

元気の良い返事で初等部の全員が返事をして、彼女の調子を遮るのだから少しばかり年上な自分達としては『止めておいた方がいい』とアドバイスをしていたが…。

彼等は理解は出来てないのだろう『演出』とはいえ、間違った事はしていないという意識が強いのだから。

おかげでこちらは呆れても、笑えなかった。

そんな中をレフィューは、顔をしかめてはいたが進行を続けるのは素直に感心できた。

「…まあ、パトロールの意味は解るかな？」

するとロウファは元気良く『はい』と返事をして、一步前に出て、パトロールの意味を答える。

しかし、それにはレフィューだけではなく、自分達全員が顔をしかめる事になり、レフィューの後ろにいる自分の隣にいたイワトが

肘で小突いて言った。

「なあ、アラバ、やりすぎじゃろ？」

ロウファは、まだ淡々とパトロールの意味を言っていた。

「そうですね、まるで教本にある通り、昔、テレビの教育チャネルでこんな道德番組を見た事がありますよ」

「なんじゃそりゃ？」

するとイワトが聞いて来たのを、前にいるレフィーユが肩を竦めたのが見えたので、聞こえるように言う。

「演技もバレバレ、台詞も棒読み。」

エキストラすら、まるで静止画像のように動かない」

「ふん、この場合、道德番組じゃなくて、特撮番組に出る。少年防衛隊よ」

すると反対側にいる、セルフィは答えた。

その通りだと思う。

なおも説明が続く中、自分達が笑えない理由に目をやる。

初等部の服装である。

レフィーユ、セルフィはいつも通り制服を着ている。

だがロウファ、初等部のパトロールに出る服装と言えば制服ではなく…。

「オレンジ色の蛍光服、ヘルメットで…完全防備。」

後は宇宙怪獣が出て来るだけですな」

「ふん、モンスターを知らぬ間に相手をしてるからでしょうよ。」

そんな事より、どうして私がここにいるのか知りたいわよ」

「それは私と言えますね、私は治安部でないのでしょ？」

二人して元凶であろう姉を見るが、ちょうどロウファの説明も終わったらしくレフィーユは無視するように聞いて来た。

「ご苦勞、ではロウファ、お前は先ほど、スラスラとパトロールに関して、大事な項目を挙げたが、その中で。」

犯罪の予防効果、犯罪者の排除、怪我人の対処、と三つを答えた。何が大切だと思う？」

するとロウファは、即答する。

「はいっ、犯罪者の排除です！！」

「ふっ、どうして、そう思う？」

「速やかな犯罪者の排除が、全ての予防効果になり、怪我人の増

加の防ぐ大事な要因だからです」

さらにレフィーユは肩を竦めたので、自分も思わず呟いた。

「言わされてますね…」

「ふん、よくわかったわね。」

多分だけど、入念に練習してたのでしよう。

あの母親が、パトロールの説明しながら、教育してるのが目に浮かんじやうわ」

「ふつ、こういう相手は、こうすれば意外と脆いというのを見せてやろう」

不意に二人の耳に、彼女の声^{レフィーユ}が聞こえた。

彼女にとって自分達がいる場所は後方だと言うのに、驚いて二人で顔を見合わせていると、構わずである。

「ロウファ、それで何点の答えだと思う？」

するとロウファは言うまでもなく。

「100点です!!」

自信たっぷりと言う、しかし、レフィーユは冷徹に答えた。

「それでは、ようやく50点の解答だ」

『えっ?』と驚くロウファは、視線が泳いだ。

親でも捜しているのだろうか、一瞬、そう思うくらい彼の動きが止まり静かになったが。

「どうしてですか、ボク達は、先の武道の時間でも立証しました。

ボク達は現場でも通用します。理由を教えてください!!」

これも減点の要因だとも知らずに、レフイーユに食い下がったが、彼女は冷静だった。

「ふっ、お前達はそれを勉強しにやって来たのだろうか?」

第十話

かくしてパトロールは始まった。

「あ、あれ？」

そんな中、隣を歩いていたミクモが何かに気付いた。

「ど、どうして三組に別れて、始めないのですか？」

「そういえば日程表には、そう書かれてましたね。まあ、事情ですから、全員でパトロールをする事にしたのでしょ」

「そ、そうですか…」

明らかにミクモは安堵を浮かべたので、おかげで自分が年上のためか、つい冷やかしてしまう。

「おや、犯罪者の鎮圧とかしたかったのですか？」

「い、い、いえ、そんな…」

「そんな装備してますからね、さぞ、戦闘に特化しているのでしょうね」

「い、一応、用心のためでやってるワケで。」

そ、それにここには漆黒の魔道士がいるって、ゆ、有名ですから」

それを聞くと、冷やかした自分が顔をしかめてしまう。

そんな自分の心境などわかるわけがなく、当然、ミクモが話す事は、これに限る。

「あ、あの…。」

そ、その魔法使って、世界で唯一の西方術を使うって、き、聞きますけど、や、闇とはどういうモノなのでしょうかな？」

珍しい事を聞いてきたなと思った。

人は自分の事を始めて聞いた時に、こう聞くのが『普通』だからだ。

『ホントにソレは、闇だったのか？』

昔、レフィーユが初めて自分の事を聞いた時にしてもそうだった。

普通は見間違いを指摘してくるのだが、しかし、このミクモは、その先の事を聞いて来たのだ。

『そんな人がいるのだから、それはどの様なモノなのか？』

見た事がないのなら、確かめるのが普通なのに対し、ミクモは自分の存在を受け入れている事に目を丸くしていると、ミクモが自分に気が付いた。

「あ、あの、ど、どうかしました？」

「ああ、正直、私も一度、捕縛された事がありますが。

正直、あの『闇』をどう表現して良いのか、説明が難しいなと思
いましてね。

こういう場合、セルフィさんが詳しいと思いますよ」

「アンタね、隣にいるからって、私に振らないでよ」

そう良いながらではあるが、セルフィは説明を始めた。

自分がそれを使うから仕方がないとは言えないが、自分でもわか
らない物体であるのは正直なトコロである。

火のような質感を伴っていても、燃え移る事もなく。

丸く球体を作って肌で擦ってみても、土のような砂の感触もなけ
れば。

水のように染み込むワケでもないが、至近距離から声を発すると
声が濁る。

ちなみにコレは、自室に籠り、初めての闇を一人で試した時の実
験内容だが…。

今、思うと仕方がない事とはいえ、寂しい過去である…。

そして、セルフィの説明は、ほぼその通りの内容を話していた。

「つまり、あの闇に捕縛されたら脱出は不可能だという事だ」

そんな中を、いつの間にかレフィーユが割り込んできた。

「あら、姉さん、さすがに興味があるみたいね」

「ふっ、ヤツの凄さはそれだけではないだろうからな。」

それを妹のお前は、どう思っているのか聞きたくてな」

いつの時点で話を聞いていたのか、レフィーユはそう言って自分を見つめる。

この視線の意味などまわりは理解出来ない中だろうが、ミクモは突然の彼女の登場に驚きながらも聞いて来た。

「そ、そんなに凄い人なんですか？」

「そうね、まず、あの法衣は私達の武器本来の切れ味のほとんどの攻撃を防ぐわ」

「こ、攻撃が効かない？」

「中身はどうなのかは、わかんないわよ。」

でも真面目な話、刀剣類なら纏った腕で受け止めたりしてるし、防御本能が効かない後ろから、切りつけられて、ようやく『痛み』っていうダメージを追うくらいじゃないのかしら？

見た目に軟らかい布、でも頑丈な鎧。

そんなのを着込んで、アンタの前に出てくると思っても言いすぎじゃないわ」

もともと怖がらせるつもりで言ったのか、ミクモはその通り、緊張して固唾を呑んだ。

「そんなモノは別に怖くないと思います。

全員で、勇気を持って飛び掛ければ、漆黒の魔道士なんて恐るに足りません」

ロウファは相変わらず自信たっぷりに言うが、これには姉妹揃って呆れていた。

それは『わかってないわね』と、セルフイは心で呟いたのか、姉は『そのようだな』といわんばかりに。

「ふん、じゃあアンタ、今までみんなで勇気を持って飛び掛らなかったと思ってるの？」

そんな集団戦法なんか、とうの昔に試して通じなかったから、『漆黒の魔道士』なのよ」

「お言葉ですが、そんな事を聞いたことはありません。

もう一度、勇気を持って、試してみるのがボクは最善の策だと思います!!」

「ふっ、ヤツの基本的な行動が夜だから、そう思っているかも知れんが。

残念ながら、その集団戦法を私は、あらゆるシチュエーションで試した。

そして唯一、覆した相手が、あの男だ」

「ふん、そうね。」

私も、最初は逃げる事が目的だから、そういう戦法が効かないと思っていたわ。

でも毎度毎度、逃げられているのは評価に値するわね」

「ふつ、珍しく評価するのだな？」

「ふん、事実を言っているだけよ。」

昼でも夜でも街中を逃げるなんて行為をすれば、普通はいづれ捕まるわよ」

「だが、捕まらん、あんなに派手なご登場をしてる割には、撤退時にまるで霧のように消えるんだ。」

まるでホントに存在していたのか、いなかったのかのようにな。

私は『コレ』に潜り込んでいると踏んではいるのだが…」

そう言って、指を差したのはマンホールだった。

それに口ウファは強気を取り戻す。

「でしたら、今度、事件が起きた時に緊急配備を心がけます!!」

「ふん、そんなのは模範解答よ。姉さんがそこまで予想してなかったと思うの？」

なら…。

『そこまでして、どうして今まで捕まらなかったのか?』

そう聞かれたら、原因が違うからって言うしかないじゃない」

『おお…』と、周囲がセルフィの意見に聞き入っていた。

レフィーユは、そんな妹を感心するように微笑んでいた。

そうして自分に、こう聞いてきた。

「白昼堂々現われて、そこから逃げる手段として、私は地下に逃げる以外に考えつかなかったが、お前の意見が聞きたいのだが、アラバ、お前はと思う?」

漆黒の魔道士、本人にこう聞いてくるのだから…。

「『私』に聞きますか…」

「『お前』に聞いてるんだ」

このやりとりの意味など周囲はわからないだろう。

「私も聞きたいわね。」

この前だって、魔法使いとすれ違ったりしてるのだから。

アンタの意見くらいは参考にしたいわ」

セルフィは真剣に聞いてきた。

レフィューにしても、ホントにわからないから聞いてきてる事がわかった。

「手を組んだ組織と協力しているのでは？」

するとセルフィに、こう言われるだろうと思った。

「模範解答ね…」

第十一話

「アッラバさーん!!」

すると突然、そんな素っ頓狂な声で自分と呼ぶ声がした。

「何？」

先に気付いたセルフイがその声に振り向くのに遅れてついで行くと、手をブンブンと振っている怪しげな中華系の男がいた。

「薬品店も兼ねている、中華料理店の店主だ」

「名前は『ヨウ』、気軽に呼んでYO。

アラバさん、聞いてYO、また私のミイが逃げたYO」

「あの娘こですか、確かここに来て間もありませんでしたね。

それは確かに心配でしょう」

「そうYO、私、彼女、愛してるYO。

でも伝わらない、探してほしいYO」

哀しそうにヨウは目頭を押さえていたので、コレにはロウファが意気揚々と言う。

「レフィーユさん、事件の発生ですね!？」

おじさん、ボク達にその子の特徴を教えてください!!

ボク達が探して見せます!!」

思わずヨウはキョトンとしたのを、レフィーユは笑いながらロウファに言った。

「待てロウファ、お前は少し勘違いをしているようだ」

彼女とて、このヨウと面識があったらしいが、彼女の足元に擦り寄って来た猫を抱え上げて言った。

「ヨウの探しているのは、この気まぐれモノの事さ…」

それに答えるように猫のミイは『ニャ』と答え、喜ぶヨウを尻目に当然、不機嫌になるのはロウファだった。

「ボク達は街の治安を守るための組織です。

そんな人騒がせな事で使役しないでください!!」

思わずヨウと目が合うので、頭を下げると軽く笑顔で頷いてくれたので、少しホッとしていた。

「じゃあ、キミ、治安守るなら、世間話も禁止と言いたいのかY
O」。

これ『治安維持』に、一番大事YO?」

軽くあしらい始めるので、レフィーユもそれに賛同する。

「ふっ、確かに世間話、挨拶の有効性は治安維持に高い効果をもたらせているのは有名な話だな」

「そうYO、警察では出来ない治安維持もするの治安部の仕事YO。
〇〇。」

アラバさん、この点、レフィーユより凄いYO。

ねっ、アラバさん!!」

そう言って、自分に同意を求めるが…。

「私は治安部ではありませんよ?」

「おう、そうだったYO」

ヨウは大袈裟に笑い、撫でて欲しいと猫を差し出してきた。

するとセルフイが何かに気付いたように呟いた。

「だからこの人を、パトロールに同行させたかったわけね…」

『にゃ〜』と猫を撫でていると、さらに人がやって来た今度はレフィーユに様があったらしい。

「あのAB放送のモノですが、本日、初等部とのパトロールをするとありましたが、取材をしてもよろしいでしょうか?」

アナウンサーらしい服装の男が、レフィーユに話しかけていた。

後ろの方で、機材を抱えた3人の男女がこちらを見たいた。

「ほう、私は別に構わん…。」

だが、この子たちはどうか…。」

ロウファはしばらく黙ったが、はっきりと答えた。

「別に僕たちは、問題ありません!!」

その解答に何かしらの違和感を感じてならなかったが、レフィーユは頷いたので、アナウンサーは承認ととったのだろう。

「では、準備いたしますので、子供達は…」

そして、ロウファ達に近づこうとした時、レフィーユは視線を細めて呼び止めた。

「ちょっと待て…」

「はい…?」

「証明証を見せてもらえないだろうか?」

「ああ、申し訳ありません…。」

撮影の際は、外しておくのが決まりでして…。」

レフィーユは自分に目配せをして、セルフィにも目配せをした。

ヨウを後ろに下げさせたのを頷きながら、そのスタッフ達を見渡した。

「ふっ、それは変だな、なら、どうして全員がスタッフである証明書を外しているのだろうか？」

これも『決まり』だとも言うのか？」

「レフィーユさん、どういう事でしょうか!!」

ボク達は全然、問題ありません!!」

ロウファは前に出たが、セルフィがすぐさま引張ったので尻餅をついた。

「まったく、どうして私の周りには、こんな輩ばかり集まるのだろうか？」

その様を見たのか、ため息をつきながら、その台詞の最中、刀がレフィーユの向かっていた。

「っ!？」

『死ねや』の語尾の辺りまで言った勢いのまま、その男は刀でレフィーユのけさ切りにしようとしたのだろうか、彼の表情は驚いていた。

彼は自らの東方術で作り上げた刀を失っていたからだ。

「はあっ!!」

掛け声と共に、男の顔面に刀の柄が当たり、思わずのけぞるが、それを見るとレフイーユが白羽取りをしたまま。

彼の武器を放り投げていた。

一体、何が起きたのか？

まだ周囲には、そんな空気すら漂っていた。

「ヨウさん!!」

いち早く行動できた自分は、誰かが作り上げたのであろう西方術の氷塊を猫を抱きかかえたままのヨウを伏せさせて避けていた。

「アラバ、大丈夫か!？」

解答しようとしたが、それは出来なかった。

「今だ、掛かれ!!」

そんな声に注意を引かれてしまったからだ。

見るとスーパーペインの育て上げた部下達が、こちらに向かって来るのが見えた。

「アラバ、お前は彼を安全なところに!!」

セルフイ、イワト、ガトウ、立て直すぞ!？」

ようやく、この一声で何が起きたのか周りにもわかった。

「えっ、えっ…?」

そして、まだ、事態を飲み込めてない、ある人物は、明らかに『浮いていた』。

第十二話

「グズグズすんなや!？」

ロウファにとって、突然、大声で叫ばれたかのようにびっくりする中、その集団はロウファに向かってきていた。

だが、幸い、いち早くイワトの投げた戦斧が間に割り込むように、地面にめり込んだので敵の進行を妨げ。

「!？」

すかさずレフィュー、レオナがロウファの前で身構えた。

「レフィュー、コイツらは？」

「スーパーペインの部下だ。」

徒党を組んで行動しているというのを聞いたことがあるだろう？

消耗戦を仕掛けにやってきたのだろう」

「消耗戦、何のために？」

「ふっ、決まっているだろう、スーパーペインの移送を確実に妨害するためだ」

レオナは舌打ちをするのと、同時だった。

「ぐおっ!!」

ちょうどレフィーユ達と後ろの辺りで、戦斧を拾った体勢のイワトに別の集団が襲いかかり、イワトは一人は何とか凌いだモノのさうらにやって来た、もう一人の攻撃に対しては何とか抱きついていた。

「踏ん張れ、ゲンゾウ!!」

鉄棒を握ったレオナが自らの付加能力『軽減』で、敵の体重を軽減させて集団の位置に放り投げるように、イワトから引き剥がすが、それに驚くのはレオナだった。

「なんだと？」

「ふっ、三人陣形…。やはり敵もこう来たか…」

「どういう事だ、どうして俺らと同じような陣形を？」

レフィーユは、スーパーペインの過去の経歴である、元治安部のリーダーだということを説明すると、レオナは何となく納得したのだろう。

「どおりで元治安部仕込みの治安部陣形か、レフィーユ、打開策は？」

「ボクたちに任せてください!!」

ボク達は訓練でも三人陣形を行った事があります。ボク達で兵力差を埋めます!!」

ロウファは意気揚々としていたが、

「駄目だよ、ロウファ、駄目だよ」

ミクモは気が動転しながら何とか言葉にして、ロウファを止めていた。

「いつもボクに負けているお前にはわからないだろうけどな。ボク達はこの時のために訓練をしたんだぞ。」

日ごろの成果を、剣術を習った先生にだって『実践にも通用する』なんて言われてるんだ。

「勇気が自体を克服するんだ。自信がないなら、隠れてろよ」

『なあ、みんな、やろう!!』

そう言っ、て、ロウファは初等部の方に振り向くが、今度は驚くことになる。

「み、みんな…?」

「さっきから、みんな、こんな調子なんだよ…」

ミクモも少し声は震えていたが、他はもっと酷く震えていた。

いや、言い方が悪い。

ホントに命を奪おうとしてやってきている相手に、純粹に恐怖を感じているのだから。

セルフイはその防御要員として、加わっていたのを見てレフィユは言う。

「…ミクモの言うとおりだ。」

お前達は他の連中を誘導させろ、退路は私が切り開く…」

「ですが、ボクはまだ動けます!!」

このまま隊列に加わって…」

「言うとおりにしろ!!」

つい声を荒げ、敵味方の周囲の注目を集める中、レフィユは静かに答えた。

「戦えない人間を放っておくのが、お前の治安部としての在り方か？」

避難経路確保も、大事な仕事ではないのか…」

そう言って、ロウファを下がらせようとした。

ミクモも『行こう』と促したが、まったくロウファは動こうとしなかった。

さらに…。

「ボ、ボクは…。」

ボクはボクはボクは、戦えるんだっ!？」

彼の東方術である『十手』を作り出し、敵の集団の中に飛び込んでいった。

「やああっ!!」

彼の付加能力の『衝撃波』が、相手の出鼻をくじき、文字通り習ったような戦法で、十手で相手を叩き伏せて一人を倒した。

「やりやがったな!!」

すぐさま陣形をとっていた相手がロウファに怒声を浴びせ飛び掛ってきた。

だが、この時、多分だがロウファも動けて、相手に対してすぐさま間合いをとれると思ったのだろう。

しかし…。

ガクガクガク…。

足が物凄く、震えていた。

「危ない!!」

レフィューも陣形を崩しながらも駆け寄る。しかし、さらに早い人影がそこで叫んでいた。

「ミクモ!!」

防御本能独特の火花が、そこで飛び散った。そして、地面には飛び散った火花と共に、飛び散った血が多くアスファルトを目立たせた。

「くそが!!」

レオナが何とか、レフィューによく追いつき。ロウファを睨みつけたが、レフィューは冷静に言った。

「…レオナ、二人を安全なところ、多少強引でも構わん、イワトと一緒に二人を頼む」

防御本能の反応に遅れたミクモは蹲っていたが、まだ、致命傷というわけじゃなかったのがレオナは見て取れた。

でも早めに行動した方が良いと判断したのか、ゲンゾウを呼びながらレフィューに聞いた。

「レフィュー、アンタは？」

「私は遊撃に移り、3対3の体勢を、4対3の有利で敵陣を壊す。

それに、ヤツが来る可能性がある」

『ヤツ』という表現でレオナは何が来るのか、察したのだろう。

「わかった、とっとと安全な場所に行ってくる。」

気をつけろ…。

アンタが傷つくと、今度はヤツが哀しむからな」

そう言うときみんなが上を見ていた事に気が付いたレフイーユは呟いた。

「ヤツ…か…」

漆黒の法衣を被ったヤツがそこに現れていた。

第十三話

建物の屋上から誰もが自分を見ていることを感じながら、そのまま壁に張り付きながらすべり降りると、レフィーユは聞いてきた。

「相変わらず派手な登場の仕方をする男だな」

「別に狙ってやってるわけではありませんが、今回、気にして、これでも地味な登場の仕方を選んだつもりなのですが？」

「壁、一面に闇を撒き散らせて着地するのは、派手というのだが？」

魔法使いはおどけて、レフィーユは微笑みを浮かべ、まるで世間話をするように、自然と集団のど真ん中に押しやられてしまう。

「ふっ、随分、にぎやかに行動するようになったではないか？」

「今回、傍観を決め付けていたのですがね。」

彼等が随分と頑張っていましたので、顔くらいは見せて置こうと思っただけですよ」

『おおっ！！』とペイン側の歓声が上がる。

しかし、こちらにしてみれば、本当の狙いは周辺の住民と初等部の避難のための時間稼ぎだった。

さらにペイン達の士気が上がり、治安部の中には後ろに下がろう

とするモノ達も見え始めたので、それを見せないようにレフィューを褒める。

「しかし、さすがですね。

いきなりの奇襲に対して、ここまでの硬直状態に持ち込むとは…。

どうやら彼等の奇襲は『ここまで』の様ですし、彼等では貴女方を消耗させるのは出来なかったようですね」

一瞬、静かになったが、すぐに士気が下がったのが見て取れた。

ようやく気が付いたのだろう。

治安部の面々の被害が、そこまで大きくない事に。

「後は『全滅』するのも時間の問題でしょうね」

「ふっ、お前だったら、どう動かしていた？」

「よく話し合って、奇襲の打ち合わせをするべきだと思いましたね」

「だが、それでも私はこの硬直状態に持ち込む自信はあったが？」

「それは現に今、そうしていますからね。

それでも、ある一手を教え込む余裕はありましたよ」

「どんな一手だ？」

「もう無理でしょうが言わせてもらいますが、私が現れたのにも関わらず攻勢に出る事ですよ。

残念ながら、今ある手駒の中にはそんな人はいないというのは……」

そう言いながら、初等部の避難は手間取っていた。ロウファだけではなく避難するのを頑なに拒む生徒達もいたのだ。

「あまりにも!!」

治安部の隙間を縫って、闇が初等部の子の身体にまわり付かせていた。

「わわわわ!!」

その初等部の生徒は慌てて取り払おうと『素手』で侵食を防ごうとするが、そんな事で何とか出来るわけがなく捕食を完了させる。

別に捕縛するつもりは毛頭なかった、だが、怖がらせるには十分な手段だった。

そして、セルフイが期待通りいち早く反応して、頭を撫で回している闇の帯を切り裂くと、その子の装備していたヘルメットが脱げた。

おかげでセルフイに睨みつけられてしまったが、このまま戦闘に加われれば被害も出るよりマシなのは目に見えていたので、レフィーユは『すまない』と頷いていた。

「…不手際が多いですよ。」

さて、みなさんも私がここに現れた意味くらいは理解してほしいのですがね？」

ペインの部下はどういう事か、聞いて来たので肩を竦めながら答えた。

「ただでさえレフィーユさんに硬直状態に持ち込まれて、もう少しすればセルフイさんがやってくるのですよ。」

そうになると、もう勝てる道理がなくなるのは目に見えているでしょう。

ここは私に任せて、さっさと撤収しなさいと言わないとわかりませんか？」

「に、逃がすな。このジング…」

「おやおや、そんな事で陣形を崩すとは随分な小物ですね？」

そういいながら闇を使って、先ほど脱げたヘルメットを拾い上げるとレフィーユは、こちらもホントに逃がすために時間稼ぎをしているのだと、態度でわかったのだろう。

「ふっ、部下思いだな。義理でもあるのか？」

「いいえ、ありませんね。」

ただあの人達は、ホントにリーダーを慕っていますので…？」

「どうした？」

何か違和感に気付いたので、一旦、周辺を見回し、あまりにもヘルメットを凝視していたせいか、レフィーユは気になったのだろう。

「ちょっと静かに…」

治安部も取り囲みだしたが、自分の奇行をじっと見ていた。

「レフィーユさん、これ…」

そう言っ、ヘルメットを耳に当ててようやく『違和感』に気が付くと、ヘルメットをレフィーユに手渡すと同じように彼女も耳を当てていた。

ちょうど耳を付けている、その辺りは、よく聞こえるだろう。

『頑張るのネム、貴方は戦うの。解る？』

そのヘルメットには、両親の声が聞こえていた。

『避難なんか、無視しなさい…』

聞こえてるの…？

貴方は戦うの』

多分、このヘルメットを装備していた子の両親の声だろう。

このあまりの異常さに、思わずレフィーユに聞いてみた。

「レフィーユさん、今回は何と戦う事になるのでしょーね？」

第十四話

「へえ、そんな事が…、やっぱシャバは大変だ」

その夜、ペインに夕食を届けて、今まであった事を話していた。

「だが、お前、そんな事を俺に話していいのか？」

セルフイもそれに納得出来てないのか視線が少し痛い、こっちも自分なりに目的もあるので、それを踏まえた話をする。

「今回、別に貴方と、貴方の部下には連絡手段はありませんからね。」

これくらいの情報漏洩しても構わないでしょう？」

「だが、そのかわり何か情報を寄越せ…。」

お前はそうするつもりだ」

「おや、わかりましたか？」

これにはさすがにペインも『か』と呆れながら答えた。

「あのな、交渉する相手を間違えてねえか、俺が作ったファミリ―を売ると思うか？」

「ファミリ―…家族ですか…。」

まあ、さっきも言ったように私はあのモンスター、両親達とあなた方『ファミリー』が通じていたかどうかを知りたいだけなので『割り』には、あつてはいると思いますよ？」

「『割り』…。」

なら、お前の考えには何か裏がある。

俺はそう考えて、交渉には乗れねえな…。」

「私は『交渉』をしているつもりはありません。

これは『交換^{トレード}』なんですから」

「トレード？」

「トレードは、自分が損をするように交渉をするのは基本ですよ？」

「なあ、お前、俺が脱獄する気がねえと思ってねえか？」

「おや、脱獄する気だったのですか？」

白々しくペインに聞いてみると、最初は堪えていたのかとうとう笑い出した。

「はははは、いいね。面白そうだ。

なら教えてやるか…。」

適当に襲った感じがしてる。大方、消耗戦を狙ってきたってトロだな？」

そんなレフィーユと同じ見解をしながら、推測ながらもペインは答えた。

「つまり関係がねえと思ってもいいんじゃないのか？」

あちらにしても魔法使いと結託した方が、それこそ『割り』に合うだろうよ」

そう言いながら、ペインは軽く笑いながら食事を進め、思い出したように聞いてきた。

「そういえば、あんた等の方で怪我人が出たって言ってたじゃねえか、ソイツは大丈夫だったのか？」

「無事ではなければ、こうやって食事には来なかったのですが……ねえ……」

「ああ、どうしたい……？」

ついミクモの事を思い浮かべてしまい、声が詰まってしまうが、代わりにレフィーユが答えた。

「ミクモの東方術の付加能力が再生……『傷を治す』というのが幸いだった。

私も始めてみるが、人間の傷が、ああも簡単に治るのは驚いたよ」

「：レフィーユさん、あの時、ヨウさんの避難で遅れてやって来てなんですが、ロウファだけじゃなく、みんな、怪我をする事を甘く見てるような気がしてまして…」

『大丈夫、アイツなら心配ないよ』

ロウファの、その時のセリフを思い出しながらも、その光景を思い出す。みんな何事もなかったかのように、レフィーユの指示を待っていた。

それはヘルメット越しに指示はあったのかも知れない、だが、ロウファは次に言った台詞にあまりの異常さを感じたのは言うまでもない。

「ふっ、『今度は絶対に恐れません』：か、足が笑っていたのも解らなかった男が、自分で言えた台詞だと思いたくないものだな」

「なるほど、だからお前が、俺にも情報を求めるワケか…」

ペインは食事を終えたらしくスプーンを、食器の上に乗せた。

自分はそれを片し始めると、ペインは食後独特のため息をついて呟いていた。

「何で、こんな事も出来ないの…」

不思議と重々しく聞こえたので聞いてみる。

「何です、それ？」

「いや、昔な。」

そんなフレーズで、教育された『バカ』なヤツを思い出してな。

いつの時代にもいるモンだ…」

ペインは心なしか哀しそうな顔をしていたが、自分達の視線に気付いたのか、すぐに言った。

「でも、わかってんだろ。」

ホントに危なくなるのはこれからだ。

モンスターどもが何を要求してくるやら…」

すると、レフィーユのみるみる曇っていくのに、さすがにペインも気付いたのだろう。

「…もしかして、来たのか？」

「ふっ、あくまで私の意見など、反論と聞こえるのだろうか。」

自分達の意見を正すために、今度の組み手の際に自分達の選んだ初等部の誰かとロウファを戦わせて、どちらかが正しいのかを決めようとな…」

これにはペインも呆れながら言った。

「ホント、シャバは大変だ」

第十五話

ロウファが強いだろうとされているのは、別に前の立ち回りを見ただけではない。

『魔法が使える』この時代、彼が秀でていると言われるのには、大きな理由があった。

彼の東方術『十手』という簡単な武器に、付加能力である『衝撃波』その二つがあまりにも基本的だからだった。

凡庸性に優れているというのは教本にも載りやすく、指導する人間にしても簡単に教え込め、自分の戦術を早い時期に叩き込める。

そのおかげが彼、ロウファの自惚れる理由なのと言うまでも無いのだが…。

完成された戦闘能力が相応の成績をたたき出す内は、彼がこの自惚れを自覚出来るのは難しいだろう。

「おっと…」

食堂の洗い場にて思わず収めようとしたスプーンを落としそうになるが、ようやく片付けが終わった。

そこを出たのは深夜に差し掛かろうとしていた。

「アラバ」

後ろからレフィューの声が聞こえてきたので振り向くと、どうやらちやうど彼女も帰りらしい。

そして、やはり気になる事なので彼女に聞いてみた。

「挑戦を受けるのですか？」

「ふっ、おそらく今日中、明日には受けざるおえなくなるだろうからな。」

たえ仕組まれているとしても、目星くらいは付ける必要があるだろう」

「やはり気付いていましたか？」

「ふっ、『負ければお前は、モンスター^{わたし}たちの言う事を聞け』と言っている様なモノではないか。」

これほど滑稽な話はないが、私とて実践に行動できない生徒を現場に出す気など毛頭ない：」

そうは言うが難しい検索条件の中で、初等部の生徒を探しださなければならぬのは間違いない。

それならレフィューと手合わせさせて、自信を無くしてしまえば良いのではないかという、自分達側の白鳳学園生徒達にも、そんな意見も出始めているが誰が燃え盛る油に水を注ぐだろう。

「受けざる負えなくなりますよね…」

そう言っている内に、自分の部屋に着いたのでカギをクルリと回していると、自分の表情が変わった。

「どうした？」

「カギが開いてまして…」

「なんだと…」

自分が魔道士だからだろうか、すぐさま彼女は警戒する。

お互いに頷きあって、隙間を少し開けると電気も付いていた。そのおかげで誰かがいると言うのがわかった。

さらにゆっくり中を覗き込むと…。

「…セルフィ？」

話し声が聞こえて来たのである。

「まったく姉さんといい、どうして…答えなさいよ」

誰かと話しているのだろうかとさらに覗き込もうとするが、セルフィのいるであろう位置には、彼女の東方術であるハルバートの柄が見えたからので、それがさらに警戒を強める結果になったのだが…。

ようやく異変に気付いたのは、彼女の立ち位置から話し声が聞こえるのなら、相手いる位置には自分のPCがあったからだからだろう。

「ふん、私なんか、いいいいったいい、何なのさああ」

確信に至れたのは、ろれつの回らない声と机の上のある飲み物だった。

「あう、何してんのよお。」

アタシあ、アンタに言いたい事があんのお。

こっちに、座んなさい!!」

そんな酔っ払ったセルフイに、見つかってしまった。

第十六話

「…アラバ、一つ聞いてもいいか？」

「何でしょうか？」

「どうして、学生身分のお前の部屋に酒が置いてある？」

「食用酒ですよ。」

あの人、私が料理をするのを知ってまして、あの後、ヨウさんからももらいました」

「だからと言え、学生のお前が酒を持ち込む理由にはならんだろう？」

レフィューは、いつまでも酔っ払って上機嫌になっている妹を見てられないのか『ふるさとの味 ブドウ100%』とラベルの貼ってあるビンを眺めているので一応、説明しておいた。

「それは結局、お酒を持ち込む事ですので私も断りましたよ。」

ですけど『どうしても』と言いますから、断りづらくて…。

バレないようにしてくれ…と言ったら」

「あのビンにラベルを張り替え、差し出して来た…というワケか…」

するといい加減にコソコソしていたのが、酔っ払ったセルフイにも伝わってきたらしく…。

「ふうん、なあに、イチャついてんのよお!!」

そもそもしいい歳こいた女が、こおんな深夜に男の部屋にやあて来て…。

座れ、このアポレ」

一瞬『誰?』と疑問符が浮かんだが、自分を見て言っているの自分の事だろうと思ひ指示の通り『正座』と言われて座ると、セルフイはベッドの上に腰を掛け服を脱ぎ始めた。

「ちょ、ちよつとセルフイさん!?!」

「あによ、ちよつと暑いだよ、この部屋…」

「セルフイ、エアコンがあるだろう?」

レフィーユもさすがに妹を止めようとしたのだが…

「いいの、姉えさんは調べる事があつて…忙しいの。」

こんなヤツの相手は、私に任せて、あそこにPCあるから頑張つて…」

何を頑張ればいいのかわからないが、どうやら服を脱ぐのをやめたらしく口約どおり、自分に説教をし始めた。

「…あの、レフィーユさん。

セルフィさんって、お酒弱いのですか？」

「弱いというワケではないが…。

セルフィは酒を意識して飲めば酔っ払わないのだが、知らずに飲んでしまえばこんな風になってしまう癖があつてな」

再度、ブドウ100%とラベルの貼られたビンと、未だ氷の入ったコップを見つめて答えた。

「つまりカモフラージュが裏目に出て、ロックで味わったからこうなつたと？」

「そのようだ、そして、姉という意見として言わせてもらうが、こうなつたセルフィは…相当、厄介だ」

「厄介って何よう。

大体、飲酒ってさあ、お祭りの時に大人が薦めたりする地域だつてあるじゃない。

飲酒はいけませんって言うけど、子供の私たちや、そんな好意やノリで薦めた人たちの酒なんか断れないってのよ。

アンタ、私りあ、そんな人達を逮捕しろってのお？」

何故か自分が怒られて、酔っ払いの妹を姉と二人して冷ややかに視線を送っていたが、酔っ払いセルフィの話題は先ほどの留置所の

話になっていく。

「アンタさあ、犯罪者と話すのはいいけどさ。意見を求めるってどういう頭してんのよ」

『説明しなさい』とハルバートで『ゴン』と床を叩く酔っ払いは、目を座らせたまま刃先を自分に突きつけてくるので、警戒と共に説明を始めたのは言うまでもない。

「『元』とはいえ、もう一人のリーダーがいるのですから、今回の事態に、その意見も取り入れてみようと思ってやってみたのですが…不味かったですかね？」

下手に…。

あくまでセルフイを刺激しないよう、下手に出て細心の注意を払って説明をする。

明らかに酔いが冷めたら、忘れているっていうタイプなのが先ほどの床にハルバートを叩く様で見て取れたのだ。

この妹は絶対、弁償しない。

床が打撲独特の凹みを見せる中、セルフイはさらに斧槍で床を叩く。

「何で私に相談しないのよ!!」

毎度、毎度、困った時は姉さんか他の誰かじゃない、何のためのIQ230だと思ってるのよ。

答ぬあなさいよ!!」

「セ、セルフイさん、飲みすぎですよ…」

とりあえず年上の采配として、お酒を取り上げようと注意をする
が、クダをまく理由になってしまった。

「大体い、アンタは女の扱い方になってないのよ!!」

「は、はあ、扱い方ですか？」

「『女』の扱い方!!」

私かりやしてみれば、その座り方だって悪いのよ」

そう言って、最初の指摘は自分の部屋で正座をさせられた体勢で
あったらしい。

「どうして自分の部屋なのに正座してるのよ。」

それも俯き気味、人と話をする時は目を見て話しなさいって言わ
れなかった？

目までは行かなくても、せえめて顔を見るくらいしなさい」

確かにごもつともな意見だが…。

「……」

こちらとしては顔を上げなかった。

「ふっ、今日は上下おそろいの白か…」

レフィューも思わず笑みをこぼしてしまう。

片足を上げた、セルフィは『白』を完全に見せた形でそんな事を言っているのだ。

するとそんな事もわからなくなるほどのこの酔っ払いは何を勘違いしたのか…。

「駄目よ、そんなんじゃない!!」

再度、ハルバートで床を叩いて立ち上がったセルフィは、こちらに擦り寄ってきた。

「ふん、まず、その上がり具合から直すべきね」

そう言って、自分の顔を驚づかんできた。

「セ、セルフィさん!？」

「あによ、私がアンタの上がり症を治してあげようってのよ。」

アンタ、女を見るだけで、顔を上げられないんでしょ？

だったら、それ以上の刺激を与えれば、アンタは慣れるってわけよ」

『解る?』と言いながらセルフイは、自分の顔を掴んだまま目を据わらせて顔を近づけてくるので、さすがにレフィーユも止めに入る。

「セルフイ、やっていい事と悪い事があるぞ!？」

腕を引き剥がそうとするが、妹も普段鍛えているため中々、離そうとせずこう答えた。

「あによ、これは姉さんためでもあんのよう。

それとも…」

その時、据わった目が『にんまり』と笑顔になった。

「!？」

その性だろうかレフィーユは自分を見た。

「姉さん、見本を見せてあげましょ…」

セルフイの握力が緩んでいくのが、明らかにわかるのが…。

これからの始まりだった…。

「やめろ、セルフイ」

姉に抱きつく妹、レフィーユが明らかに『怯え』を見せた。

「いいじゃない、女同士よ」

「やめろ、やめんか…んううう!?!」

妹と姉の唇が合わさっていた。

第十七話

「んんん、んんんっ!!」

その姉妹の接吻は、異様に長い時間に感じられた。

レフィーユとて、今、現在進行形で暴れている。

妹の顔を引き剥がそうとして両手を使って顔を押しつけようとしていたのを見た。

セルフィと合わさっていた顔をどかせようと首も捻り。

そして、タップしていた。

「んんん!!」

一向に離れないセルフィにレフィーユはどうとう自分に向けて手を伸ばしていた。

おそらく先ほど『アラバ』と言ったのだろう。

助けを求め手を伸ばしたが、時すでに遅く。

ぐったりと…。

レフィーユは崩れ落ちた。

「ふはあ!!」

行為が終わり、セルフイはいも変わらず上機嫌なままであったが、レフィーユは虫の息で聞いて来た。

「…アラバ、どうして助けてくれなかった？」

「あんなの無理ですよ。どう助ければいいのですか？」

そんな自分の解答にレフィーユは、右手で頭を抱えながら答えた。

「『厄介』なのは、これからだというのに…」

一瞬、何の事だと思いましたが、先ほどの妹が暴挙がこの姉が言った事を思い出させ、そんな中を構わずレフィーユは息を絶やせながら答えた。

「家族間、姉妹、故にこうなる事を知っている分、本来なら…逃げるべきだったのだが…」

このセルフイの能力は、今の…私にとって利用すべき『点』だったのが失敗だった…な…」

「利用すべき点、酔っ払ったセルフイさんが？」

一瞬、酔っ払っているセルフイを見るが、すぐに手を重ねられたのでレフィーユは言った。

「ふっ、気にするな…。」

これは私が利用できると思って、どうしても足を止めてしまった

私のミスだ、今になっては…どうにもならん事だ…。

お前にとっては…」

酒気が漂ってくる中、レフィューは『くくくっ』と喉で笑って言った。

「悪夢の始まり…だ…」

そう言っただけで彼女は事切れ、手が『だらり』とフローリングに落ちた。

すると後ろから殺気に似た、気配が背後からした。

「さあて残るのは、アンタだけね」

優しくレフィューを横たわせると、自然と聞いてみたくなる。

「そうですか、私にとって解らない事だらけなんですけど？」

『正解は、逃げるべき』という、彼女の遺言は胸の中にしまいながら、出入り口である玄関を確認していると彼女は言った。

「そうよね、アンタ知らないモンね。」

アタシね、酔っ払うと、とうても『厄介』なのよ…。

だからパーティとかで、毎回、色んな方法で確認しながらシャンパンとか飲んでんの。

そんな私でも、やっぱり家で間違って飲んじやった事が…。

あれ…」

目を瞑ったまま説明を始めたのを見逃さなかった。

そのまま玄関まで、まるで弾かれたようなスピードで逃げる。セルフィが気付いた時には靴を、指先に掛けようとしていた。

その時、『ゴン』という鉄が床を叩くような音がした。

「いっ！！」

…一瞬、何が起こったかわからなかった。

自分の肩の辺りを何か押し付けられた感覚が襲ったと思えば、駆け込んできた性質上、身体が前転しながら宙に舞う。

一回転したんだと思うが、さらに不測の事態に身体が自然と緊張したが中に浮いた身体はまるでクモの糸に絡み取られたかのように身動きが取れなかった。

「まったく油断も隙もありやしないわね」

セルフィの近くまでクレーンされ、手にしていたハルバートを『ゴン』と床を叩くと、自分の身体に絡まった『足場』が解け、腰から床に落ちた。

「なるほど…厄介ですね…」

少し悶絶して腰を擦っていると、後ろから誰かの声が聞こえた。

「それでお前は、何をしようとしていたのだ？」

見るとレフィーユが身体を起こし、寝転がっている自分の視線を追っていた。

「レフィーユさん、気が付いたのですか…？」

「気が付いたとは…何だ…？」

嫌な予感がした。

鋭さすらある細い目が、据わっていたのもある。

ただ、この『予感』に気付くには、少しばかり時間が掛かった。

何故なら彼女の『それ』は見た事がないというのもある。そして、今、『飲んでいない』のが大きな理由だった。

「なあ、アラバ、お前は何をしようとしていたのだ…んん？」

嫌な予感というのは、口にしないといけないのが苦痛である。

「レフィーユさん、もしかして…？」

すると無言のまま、玄関の方に近づいて行く。

そのままノブに手を掛ける。

部屋を出るのかと思いましたが…。

ベキィ！！

レフィーユは、ドアノブを握り取って持って言った。

「これが…欲しかったのか？」

「レ、レフィーユさん？」

「お前の欲しいものなら何でもくれてやる…。

さあ、次は何が欲しい？」

『厄介』な事になっていた…。

第十八話

お酒は二十歳になってから…。

「…というより、これ、まだ続くのですか？」

「だから、お前は何の事を言っている…？」

酔っ払ってレフィューの視線がさらに鋭くなっていたが、少し状況を整理しようと思った。

どうやら酔っ払ったセルフイは、自分の『酔い』を相手がどんなに酒が強かろうと、泥酔に至らしめる事が出来るらしい。

その方法はとりあえず言うまでもないだろうが、今、とても危険な状態なのは変わりはない。

治安部のパトロールでは、酔っ払いがいたら、すぐに連絡を入れると言われるくらい危険なのだから。

「ふっ、犯罪ではないが、魔法が使える今では、酔っ払いに武器を持たせてしまう事ほど、危ない事はないからな」

そう言いながらレフィューはサーベルを作り出すというのは、いかなモノだろうかと、悪い視線を送っているとセルフイが姉のサーベルをじっくり見ていた。

「いいなあ、私の武器って長いからさ。」

狭いところでの立ち回りを考えないといけないのよねえ。

前々から姉さんの武器って、良いなと思ってたのよ」

「セルフィー、お前は全然、自分の武器がわかってない」

「どうしてよ？」

「今は『揺れ』の時代なんだ、お前がブンブン…槍を振り回すたびに、どれだけ私が焦燥感を感じたと思ってる？」

「姉えさん、それは今だけよ。」

男は結局、バランスを求めるの。

姉さんは『貧』ってワケじゃないのだから、放っておいても人気くらい出るわよ。

ね、アンタもそう思うでしょ？」

どんどん会話が怪しい方向になって来たので、白々しく聞いてみた。

「そ、そんな事より、明日、目星はつけるとは言っただうやってやるのですか？」

「…ああ、その事か、直接募集してみて面接だな。」

合格させる気は、こちらには無いがな」

「どういう事でしょうか？」

するとレフィーユは酔っ払っているとはいえ、真面目に話を始めた。

「私がどうしても避けたかったのは、噂によって外部に情報が漏れるという事だ。

いくら私でも、私がペインの搬送日を決めた途端に、学園内は騒然とする事は避けられないだろう。

その際に初等部の子供に、ペインの搬送日が漏れる可能性が生まれる。

…それを踏まえれば、あのモンスターどもは自分の子供に、ペインの所在すら普通に話すような。

…まさにモンスターだ。

…だから、…このイベントを盾にして、その隙に私達がペインのファミリーを確保する手はずを整えるのが狙いなんだ…」

よほど酔っているのだろうか、レフィーユはまともには説明していたがだんだんと頭を揺れていた。

「大丈夫ですか？」

「ふふふ…」

そして、急に笑い出すレフィーユに少しかり危なさを感じてい

た。

「…お前は優しいな」

「突然、何を言うのですか？」

「わかってる。」

いつもお前は自分より、人の心配をするような男だ。

そんな男に私は酌をしたい…」

すると段々、目が据わらせ『ぐいつ』と一升瓶をあおり始めるレフイーユを見て思わず…。

自然に後ろに後ずさりするが、尻餅をついてしまう。

「の、飲みすぎですよ？」

「んん？」

口に酒を含んで、顔を近づけてくるレフイーユから逃げ出すため後ろに走り出したが、その時『ゴクリ』という何やら、飲み干すような音がはっきりと聞こえた。

「どこに逃げようというのかな？」

自ら取り外したよほど誇らしそうに、ドアノブを見つめる、レフイーユの目は…。

赤く光っていた…という…。

「レフイーユさん、気を確かに!？」

そう言いながら、自分はドア目掛けて体当たりするが一向に開かない。

「ふふふ…」

尚もレフイーユはゆっくりと酒を煽る。

その姿に異様な恐怖を感じ…。

さらに体当たりを繰り返し、開いたドアノブの穴に指を突っ込んだりしていた。

その姿には、主人公の姿はなかった…。

ただ言うなれば…。

「ふふふふ…」

脱出不可能な自分の部屋から逃げ出そうとする哀れな犠牲者だろうが、詳細はあえて言うまい。

「ぎゃ〜〜〜!!」

ただ最後に彼が再度、思った事があった。

酒は二十歳になってから…。

第十九話

「ふあああ…」

イワトは早朝に相応しい大あくびを披露していた。

彼は『スーパーペインの監視』というAM1..00からAM5..00までの任務を終えたのだから仕方ない事だろう。

後、彼の仕事と言えば、治安部の活動で特別に設けられた休日を利用して爆睡するだけ、それだけ自室に戻る帰路への足取りは軽く、アラバの部屋を横切った時。

ギィィ…。

背後でそんなドアの音がした。

それは別に友達の部屋だから何事でもない事だと思うだろう。

だが、朝日も上がってもないそんな時間にドアが開くので不振に思い、振り向くと、そこから出てきたのは、眠っている妹を背負ったレフイーユだった。

「…おはよう」

「レフイーユさん、どうしたんすか？」

知っている人物だったので少し安心したが、彼女が出てきたのは友達の部屋、しかもドアノブに何の代用だろうか木の棒が突っ込ま

れていたのが、さらに不信感をあおったのでイワトはアラバの部屋を覗き込もうとしたが、ゆっくりとレフィーユは手で制し言う。

「そっとしておいてやれ…」

止める気もないのだろうか、さっさとレフィーユは出て行く。

おかげでイワトはさらに困惑してしまうが、イワトはそこが友達
の部屋だったのため、ほっとけなかったのだろう。

そっと一度は閉じたドアを開いて…。

「アラバ…?」

その名を呼ぶが、まだ薄暗い室内だったせいもあり、最初は誰も
いないと思えるほど、その部屋は静まりかえっており、トイレ、浴
室、さらに窓際にいたるまで奥へと順に調べるが見つけられず。

更に日が昇ったのか、さらに明るくなってようやく見つける事が
出来たが驚いた。

「うおっ、アラバ、…どしたんや?」

「何でもないです」

「何でもないって、お前、服がボロボロじゃろうが?」

イワトの言うとおり、彼の衣服はズタズタに切り裂かれて…。

カタカタカタカタ…。

と、彼は震えて『ぶつぶつ』と何やらを呟いていた。

「アラバ、何があったんじゃ？」

イワトは何を呟いているのかを耳を近づてみた…。

「昨日の私は死にました、昨日の私は死にました、昨日の私は…」

「アラバ、しっかりしろ！！」

アラバ…、アラバー！！」

……。

そんな叫びの朝を迎えた、アラバは…。

「はい、よーいどん」

手拍子と同時に初等部のミクモを走らせていた。

今は体育の授業で親睦を深めようとしている最中である。

なら、普通はスポーツで交流を深めるのが普通なのではないのかと自分でも思うが、誰かの差し金なのだろう。

みんなが一对一で体育を行っており、レフイーユもロウファと一緒に体育をしている最中である。

今、ミクモのタイムを計ってはいるのだが、それより気になって

いたのは、ミクモ、いや、初等部達の服装である。

前のパトロールの時に見られた、あの少年防衛隊の服装だった事だ。

おかげでミクモを走らせている間、その服の装備を一品、一品、確認出来るいい機会ではあったが、ほとんどの生徒はそれに気づいて、少しやりずらそうにしているのも無理もない。

とりあえずゴールをしたミクモに装備されていた信号弾の銃口をミクモに向けてみた。

「いけませんね、タイムが落ちてますよ」

ミクモはさすがにジョークだとわかるが、一応、身を屈めるので弾が入ってない事を見せながら返すと、さすがに次に何をやるのかをわかったのだろう。

今度はヘルメットを差し出すために、さっきから人形を担がせて走らせていたせいか、それを脱ぐの時間が掛かっていたのを見てしてアドバイスをした。

「人を運ぶ時は、無理に担がない方がいいですよ」

「えっ、で、でも、ロウファに、けが人を引きずったらかわいそうだって注意されましたから……」

「…なるほど」とあの性格なら仕方がないとロウファを見ていると頷けたが人形の足の部分をミクモに見せる。

「これ、引きずった後があるでしょう？」

足に怪我をしているのなら話は別ですが、みんなそうしてますので、別にいいと思いますよ」

まだ納得が出来ないのか、ミクモは戸惑いを見せるが肩を竦めて言う。

「貴方は初等部なんですよ。」

自分の命を助けられて、大の大人なら文句は言いませんよ」

そう言いながら、人間の平均体重50キロの人形を担いで、25メートルを往復して走るミクモにはつい目を細めてしまっていた。

先ほど『タイムが落ちている』と言ったが、自分の手元にある初等部の記録を軽々と塗り替えている記録なのだから。

「あああ、あのヘルメット…」

そんな彼の記録にしばらく注目していると、ミクモがヘルメットを遠慮がちに差し出している事に気がつくのに時間が掛かってしまっていた。

第二十話

そういう調子で、ミクモとヘルメットの機能を確認していると、ミクモは時折、レフィーユの方を見ていた。

自分にとってはいつもの光景だが、そのレフィーユは息を切らせたロウファに言った。

「どうした、その程度か？」

ロウファは、もう一度、構える。

さっきから一太刀も与えられない状況だったのが苛立ったのだらう。

「やああああ！！」

飛び掛る様は無防備に近く、レフィーユは冷静に横に避ける。

だが、ロウファもそれに反応出来るくらいは鍛えられているのか、レフィーユのいる方向を憶測だけで振り向く…。

「す、すごい…」

さっきからずっとミクモはこの調子で感嘆していたがこの時は、不思議とはつきりと聞こえるほどの一秒間だった。

ロウファの目視する頃には彼女はいない。

その一秒は、レフイーユが与えたのだ。

遠目から見ている自分でもわかった。

ロウファの振り向く、その体勢を読んで反対側にさらに後ろにまわった、そんなレフイーユはまるで座禅をする僧侶に『パシン』とするように木刀を当てるので、ため息をついた。

「いい手品ですね」

「て、手品、そ、それってどういう意味なんですか？」

そう言うと、レフイーユはまるで呆れるようにロウファに言う。

「立派なのは装備だけだな？」

そんな挑発にロウファは顔をそらすように身体を沈めたが、実際、これはヒントだった。

「この防衛隊の服、確かに耐火性に優れ丈夫でしょうが、かさばって行動に支障が出てるのですよ。」

さらに信号弾、照明弾、シグナル弾もありますね。

簡易医療キット、手錠に何でしたっけ…これ？」

「あ、安全ベルト、ハーネスです」

「たくさん常備しているのはいいですが、信号弾だけでも、一発だけじゃありませんでしょう。」

それを抱えて行動しているのですから、最初の行動をするのは構わないのですが、次の次のと行動を取ろうとすれば、どうしても装備の重量に振り回されてしまうのですよ」

「は、はあ、く、詳しいんですね？」

つい何ともない指摘に警戒をして目を細めてしまいが、だが相手は初等部だった。

「…まあ、年の功ですね」

そう言うのと納得をしたようなので、こう付け加えた。

「まあ、いくら上等な装備をしていても、重量も考えず実戦投入させようなんて、よほど現場を知らない、人が注文したのでしょうね」

そうミクモに言うと、どうやら思い当たる事があったらしく。

「あ、あの、じ、実はこの防護服も、ロウファのお母さんが関わってるらしくて…」

そんな中、ロウファは息を切らせている。

経験上、もう動けないだろうと解っていたが、その身体は一瞬、『ビクリ』と動いた。

思わず肩を竦めてしまう。

…おそらくだが、外野席からヘルメットに通信が入ったのだろう。

「ミュンヒハウゼン・ミチコ…」

見るとミチコも苛立っていた。

これほど実力差があったとは思わなかったのだろうか、それとも
どう思ったのだろう。

とにかくヘルメットを正すフリをして、通信を聞くロウファは見
るに耐えないので、ミクモの事を聞いてみようと思った。

「…どうして面接に参加しようと思ったのですか？」

ミクモは戸惑うが、レフイーユから手渡されていた面接参加者の
中にミクモの名前があった。

「ぼ、僕らのクラスは全員、参加…する事になってまして…」

「ご両親が薦めたのではないのですか？」

「ああ、ぼ、僕の両親は事故で…」

治安が下がったとはいえ、みんなには両親がいるものだと言
自分が思っていた。

「……」

ミクモの返答は正しい、しかしその分、つい黙ってしまった。

この反応は間違いでもある。

「あ、ああ：別に気にしてませんから…」

「私も同じ身なんですが、少し軽率すぎましたね…」

謝ると、そして微妙な空気が漂い始めたのは言うまでもない、それを取り払うために冷やかした。

「という事は『私達はみな兄弟』という事ですか？」

「あつ、それ」

ミクモは驚くようにこつちを見た、この話題は施設で育ったというから出来る。

「やはり貴方の施設にも？」

「あ、あれ、声を揃えて言うやつですよね。」

やっぱり、お、お兄さんもやらされたのですか？」

「やらされましたよ。あそこにイワトというゴツい人がいるでしょう。」

あの人もそうなんですが、一緒にやらされたモノですよ」

『へえ』とミクモがイワトを見ながら明るくなるのがわかったので、この急ごしらえの話題も役に立ったと安心していると背後から声がした。

「ふっ、何だその『兄弟』とは？」

小休止中のレフィーユが、いつの間にやらミクモの背後に立っていた。

「レ、レフィーユさん!？」

そのおかげでミクモは腰を抜かすように、しりもちをついた。

第二十一話

僕達、私達は、様々な理由、別々の場所で大変な目に合ったけど。

僕達は、兄弟だ。

血は繋がってないけれど。

僕達は『痛み』を共有できる兄弟だ。

「痛み…か…、ふっ、まさかここでもそれを聞く事になるとはな」

レフィューに『兄弟』の意味を教えると、やはり『痛み』の部分でスーパーパーペインの事を思い出したのか、そう一言、感想を言った。

ちなみにこれは両親を様々な理由でなくした子供達が入る施設に張ってあるポスターの事だった。

施設を出る事になる子供が犯罪など犯さないように、先ほどのこれを声に出して読ませ、それによって一人ではない事、相談できる場所がある事を自覚させる簡単な予防策なのだが。

実質これで犯行を行なうのを踏みとどまったりする人がいるので効果があるらしい。

そして、現在に至るまで自分を含めてやらされていたなと昔を思い出していると、まだ息を切らせているロウファがこちらにやって来た。

「レフィーユさん、もう小休止は結構ですので、ご指導お願いします！！」

「そんな事は呼吸を整えてから言うのだな。」

リーダーに求められるのは、正確な指示、冷静な判断だ。

そう猪突になるな。

落ち着くまで私は、周囲を見ておくさ」

「お言葉ですが、レフィーユさんはそこから動いてません。」

視察ならもっと近寄ってから、見に行くのが普通だと思います！
！」

「それが出来るのならな…。」

どうも私が接近すると、この初等部の生徒はどんなに疲れているかが元気になるみたいだからな、私が遠目から見た方が初等部の本来の能力が見れるのさ」

思い当たる節があるのか、レフィーユは、イワトと一緒に走っているネムを『じっ』と見る。

すると誰かと同じように、ヘルメットを直し…。

背筋を伸ばして走り出すので、どうもグラウンドから見下ろしている保護者から指示を出しているのが見て取れた。

その点を思えばまだミクモを担当している自分は、良い方だと思っ
ていると、レフィーユは微笑みながら言った。

「しかし、お前が弱みを見せるとは珍しい事もあるな？」

「それは相手に対して失礼な事をしましたからね。

ですから、こうやって謝るのは弱み以前に礼儀じゃないですか」

「ふっ、なるほど、ミクモそれなら遠慮なく聞いてみるが良い。

この男なら色々と教えてもらえるだろう」

『質問してみたらどうだ』とレフィーユは言うが、どうもこのミ
クモは年上の人に対しての抵抗があるようなので、こう促した。

「ジュース奢ってくれども、何でも良いですよ」

「私ですら奢られた事のない男がこうも言うとは、随分と大盤振
る舞いじゃないか？」

「睨まないでくださいよ。

ジュースくらい奢った事あるでしょう？」

そのやりとりで、ようやくミクモの緊張がほぐれたのか、笑いな
がら言った。

「な、な、なら、スーパーペインさんの事を教えてくれませんか

「？」

つい不振に思ってしまった。その視線を感じたのだろうか、ミクモは慌てながら言った。

「す、す、すみません。」

馬、馬鹿な事を聞いてますね」

「ミクモ、そんなの前に教えてもらっただろう」

ロウファが前に出て、レフィューの前で頭を深く下げて言った。

「すみません、僕たちはスーパーペインの事を事前に学んでました。」

ミクモ、どうしてキミは…。

『そんな事が出来ないんだ』」

この一言には、レフィューも顔をしかめていたが、ミクモは答えた。

「だ、だ、だって、僕だって知ってるけど。」

相手は100人以上を殺害した…なんて『漆黒の魔道士』より、不思議だと思わないかな？」

「そんなのスーパーペインが勝手に言って、怖がらせているだけだよ。」

そんなので怖がせたから、きっと今まで捕まらなかったんだ」

そう言って、この会話を一方的に終わらせようとしたが、レフィユは言った。

「なるほど、ではアラバ、少しばかりロウファに教えとくべきだな」

第二十二話

人間は、果たして100人も人を殺す事が出来るだろうか？

まず、いない…。

確かに時代は進み、爆発物販売、及び、作成方法が容易にインターネットで流出した今の時代、それは連続的に行えば可能だろう。

しかし、この学園に拘束されている人物は、それを用いる事無く殺害する。

つまり手にした武器、彼の東方術、多節鞭だけで人を殺める。

それを説明したアラバに対し、ロウファは言う。

「それはスーパーペインは集団で事件を起こすからです!!」

集団の中で犯行を行うから、死傷者が100人以上出た結果だと思えます!!」

元氣のよく言うが、警察とて愚かではない。

『100人以上を殺した』など根拠があるから言うのだ。

だが、問題は今はそこでなかった。

「スーパーペインの付加能力は、そのあだ名どおり痛みを与える

事にあります。

僕たちは痛みに屈しません!!」

その一言が、ロウファを含む初等部の現状を表していた。

「ちょっと、姉さん、聞ってるの？」

同じ車で後部座席に座っていたセルフイが、無線を切りながら言った。

「ふん、いくら面接で忙しいからって、今はペインのファミリーがまた暴れてるのをくい止めないといけないんだから、しっかりしてよ」

「わかってる…。」

だから、こうやって緊急出動しているのだろう。

…だが、この行動である保護者がどう動くのだろうかと思えば私の言葉に、今度はセルフイが考え込むような様子を見せて答えた。

「大人にとって、治安部って、何なのかな…」

緊急時なので赤信号を徐行する中、セルフイは尚も言う。

「確かに治安部という活動をしていれば、ある程度の将来の保障はされるのはわかるわよ。」

でも、その治安部のあり方って、まるで見世物じゃない」

「ふっ、セルフイ、確かにお前の言いたい事はわかる。

将来の保障とはいえ、その保障は『怪我』を織り交ぜた保障だというのを、理解出来ていないのだろう。

それ故に元治安部が犯罪を起こした事だってある。

おそらく、失敗を知らないからだろうな」

「失敗？」

「そうだ、失敗だ。

セルフイ、お前は勉強をした事があるか？」

「…姉さん、いくら私でもそれくらいはしてるわよ？」

さすがに飛び級で編入してきた妹に対して、自分でも失礼な事を聞いたかと思い、つい笑みを浮かべてしまうが聞いてみる。

「例えば、勉強の中に書いて覚えるという行為がある。

だが、それだけではテストで良い点が取れない。

よく言われる『闇雲に覚えようとするのではなく、要点を…』と言うヤツだ。

良い点をとるなら、参考書の使用、塾、家庭教師、様々な方法があるが…。

不思議と中等までは同じような事を勉強をさせている」

「ふん、それはそうじゃない。

まずは基本を学ばないと足し算と引き算を学んだじゃ、方程式なんて解けるワケないじゃない」

「ふっ、教育機関が定めたラインの中で『基礎学力』というのを決める。

そんな中で、必勝法が編み出されていく。

それが『要点』という概念だ。

とくにその時の私の先生を責める気はないが『歴史』の授業で『この時代のことは、ここだけ覚えていてください』と口走ったそれは…。

参考書に当たり前のように載っていた。

家庭教師も言っていた。

簡単にさせすぎ、それ故、人の生き方というのは、こう勘違いしてしまいかねなくなる。

要点さえ抑えておけば、人生うまくいく。

ここの保護者達は、こう思いもしたのだろう。

要点さえ抑えておけば、私の子供は良い点数が取れる。

人生において、私のように失敗しない…とな

「ふん、馬鹿げているわ。

子供が思うが故なんて言いたいかしら」

「失敗のない人生など、ありはしないのにな」

サイレンと共に、緊急時独特の中央に開いた車道を治安部特別車両が疾走するが、セルフィは聞いて来た。

「…ところでさ、姉さんは失敗した事があるの?」

「あるさ、小さい事から、大きな事、取り返しの付かない事も…やった」

つい彼の事を思い出すが、セルフィはそれを言った。

「彼の事?」

「…そうだな」

「…何やったのよ?」

「私の口からは言うつもりはない。

言ってしまったえば、私は自分の事を保護してしまいそうだから」
妹をバックミラー越しに見ると、ちょうど私を見ていた。

どうも聞けるかと思っていதாகしく、心なしか鋭い視線が交差し。

「じゃあ、仕方がないわね。今に集中しておくわ」

そう言つて、ハルバートを作り上げていく。

セルフイとて、私達の関係を調べようとはしているのだろう。

付かず離れず、もっとも距離を曖昧にしてまるで尾行をするように、私に対して何かを聞きだそうとしていて、収穫がなければすぐさま切り替える様を見たせい、不意に笑ってしまう。

「ふん、何よ、そんなに笑わなくてもいいじゃない」

「おそらくお前が、真相にたどり着くのかも知れんと思つてな」

そのまま交差点を右に曲がって直進するまで、セルフイはずっと黙ったままだったので、私達の事を考えていたのだろう。

辺りが騒がしくなっていくと、ようやく集中し始めた。

「避難完了は、8割くらいつてところかしら？」

「ふっ、見えた、このまま間に入るぞ？」

セルフイがハルバートを作り上げる中、返事を待たずアクセルを

踏み込む。

「ちょ、ちょっと!？」

妹が慌てて踏ん張るのを感じながら、ドリフトを効かせて、言ったとおり治安部とファミリー達の間に入る。

結果は両者、驚くと言うより啞然としていた。

第二十三話

「ぐあ!？」

車のドアを思い切り蹴飛ばした反動で体勢を崩したファミリーの一人を、すかさずサーベルで打って聞いてみた。

「ふっ、消耗戦とは、随分とボスを助けるのに手間を掛けるマネをするモノだな？」

短くまとめた髪を掻き揚げた、いつもの仕草に歓声が上がる。

その空気を引き締めるように彼女は叫んだ。

「グズグズするな!!」

保護者どもに気付かれる前にケリを付けるぞ!!」

士気が上がる、レフイーユにも油断はない、しかし、ファミリーも陣形を組んでいく、それは治安部と同じ三人陣形だった。

「はあああああ!!」

サーベルで相手の攻撃を攻撃で弾き返し、さらに攻勢に出ると陣形は崩れもする。

しかし、体勢を守っている限り、どうしても時間が掛かってしまう。

「ふっ、ペイン様々だな…」

見るとセルフィもハルバートを振り回し、相手に切りかかっていた。

「ふん、なんで、そんなに冷静なの!!」

斧槍の形成上、重量で私より陣形を崩すのを簡単にやってのけていたが、形状ゆえに残りの二人に囲まれる。

しかし、セルフィは構う事無く、一人に集中して攻撃を加えに掛かる。

戦術上、セルフィの選択は間違い。

それを見た完全に背後に回った敵が、セルフィを取り押さえようと駆け寄った。

そのままセルフィは、ハルバートの柄が地面を叩く。

すると走りかかっていた、そのファミリーの身体はまるで顔に何かぶつかり、まるで鉄棒のさかあがりをするかの身体が宙に浮いた。

「ぐあっ!!」

受身も取れず、背中からもろに落ちて呼吸困難に陥ったトコロを、さらにセルフィがハルバートを振り下ろす。

瞬く間に二人を打ち倒すが『確保』までにはいたれなかった。

すぐさま次の三人組がセルフィを遮り、残った一人が、叩き伏せた二名を回収するのでセルフィは苛立っていた。

「セルフィ、一人で掛かるな!!」

全員と連携しろ!!」

『いくぞ!!』という掛け声と共に、レフィーユは交戦中の二組に割り込みサーベルを振るう。

一撃、二撃、先ほどとは打って変わって、手首目がけて素早く打ち込む。

武器を落として、味方に対して有利に展開を運ばせようという判断だった。

そして、チャンスがあれば、一撃で叩き伏せる。

ようやく攻撃をレフィーユに仕掛ける事の出来たファミリーの一人が、彼女の付加能力、残像によって完全に体制の崩された状況でサーベルを振り下ろされていた。

「確保!!」

士気旺盛な状況だったので、治安部員も従来以上の実力を発揮していた。

「レフィーユ、まずい時間が来た!!」

しかし、ガトウの一言にレフィーユも思わず、舌打ちをする。

「注意しているのか？」

「さっきからずっと言っている！！」

ふざけた事に、もう来ているそうだ！！」

『ちい』と無線機をもらおうとした時、さらに通信が入ったのでガトウが応答する。

「レフィーユ、まずい、魔道士が初等部の車に……！！」

その時、何のために現れたのか解ったのは、レフィーユだけだったがガトウは言った。

「あいつらじゃ、相手にならん。」

ここは俺たちが何とかするから行け！！」

レフィーユはガトウを見て頷いたが、セルフィは言った。

「ちょっと、ここの指揮はどうするのよ？」

「ガトウに任せる。」

この男は、私の入る前、この学園の治安部のリーダーだった男だ」
そのまま走って行くレフィーユを見て、ガトウは周囲に叫んだ。

「これより指揮権をガトウ・レオナが預かる！！」

するとイワトが振り返って聞いた。

「レフィーユさんは？」

「いつもの所要だ…。」

お前等、何とか持ちこたえろ！！」

『おお！！』とレフィーユとは違う士気の上がり方をするが、セルフィは目を丸くしていた。

「貴方が『ガトウ・レオナ』だったの？」

「おいおい、まさか女と間違えたとか言うんじゃないかな？」

「ふん、間違えてたわよ。」

どおりで姉さんから聞いてみたら、笑っているわけだわ。

姉さんから聞いているわよ。

『良いリーダー』だったそうね」

「昔の話だ、実力の世界でお前の姉さんの方が上だったから譲ったまでだ。」

それより今はそんな話をしている場合ではないだろう？」

「そう、『治安部適合試験、第一位』の実力を見せてもらおうか

しら？」

するとガトウは背中を向けて、彼の東方術、鉄棒を肩に担いで言った。

「戦いは点数だけで決まらん」

第二十四話

レフィーユが現場に近付く頃、このロウファの叫ぶ声が聞こえていたのだろう。

「やあぁっ!!」

被害的な声でなく加害的に、十手を構えたロウファが、黒い法衣を纏った男に飛び込んでいった。

その男は、大きく息を吸い込み手を前に出して構える。

漆黒の魔道士と呼ばれた男は、ロウファの攻撃を全て防御に徹していた。

その攻撃は洗練された動きではあるが、しかし、あまりにも基本どおりなため苦労はなく連撃を受け止める。

そして最後の一撃に対して、一旦、ロウファの攻撃を左腕で受け止め。

くるりと捌いて彼の蛍光色のヘルメットの目掛け、右手で突っ張る。

当然、ダメージはなくよろけただけのロウファに言った。

「退いてほしいモノですね、貴方では相手になりませんよ」

ただ足止めをするだけだと気付かないこちらに対してロウファに

は、どう思ったのだろう。

「そんな攻撃、効くものか!!」

ボク達には恐れぬ勇氣がある、その勇氣で漆黒の魔道士、お前を倒してみせる!!」

意気揚々、しかし、それはロウファだけだった。

視線だけで戦いの行方を見守っているミクモ、後の生徒達もそうだが東方術なりで武装は施すが完全に血相が引いていた。

自然と一対一の隊形が取れたから苦勞がないとは言え…。

「そういう事は、周囲を見て言ってほしいですね」

思わず口に出してしまうほど、こちらも呆れているとロウファは言う。

「ボクは、前回、恐怖というのを知った。

もうボクは恐れはない。

この勇氣で、今度こそ、ボクは実戦でお前を倒す!!」

そういつて、ヘルメットを被りなおすので、言わされているのかどうかはわからない。

ただ、自然に『敗けは許されない』と言い聞かせるように見えてしまう。

そんなロウファは距離出来たのを見たのか『基本どおり（ベ－シツク）』に彼の付加能力、衝撃波を連続で素振り放つ。

それを自分はただ法衣を翻して衝撃波を迎え撃つ。

ロウファは視線を一切外さないのは、飛び掛るタイミングを見計らっているからだろう。

「甘いですね…」

そう呟き、ロウファの放つ弾幕を、法衣で受け止める事によって黒煙を上げ。

彼が気付いた頃には、ロウファの視界は完全に闇で塞がれていた。単純な戦術ミスに苛立ちを見せた瞬間、彼の視界が次に目にするのは闇の中から襟を掴んだ両腕だった。

「一つだけ言っておきます、貴方に足りないのは…」

ロウファは引きずり込まれるかのように、前のめり…。

「『工夫』ですよ」

「うわあああ!!」

一気に引き寄せられて、足払いから放り投げた。

彼にも受け身を取るといふ動作も練習していただろうが、投げら

れば視界を有して一ヶ所のダメージを無効にする防御本能など意味がない。

ダメージと痛みにロウファは悶絶していた。

もともと装備も重く、動作に支障が出ている事ですら改善してないのだから、誰かと同じようにアドバイスしてしまう。

「貴方がそんな重たい装備をしている限り。

これから先、誰にも勝てませんよ？」

同じ事を指摘され、ロウファは驚くが、この会話はどうやら聞こえているらしい。

ロウファはヘルメットを、押さえたまましばらく黙り、答えた。

「ま、惑わされるモンか。

この装備は、僕たちの安全を守るためにあるんだ。

そうやって、自分の思う通りにしようたって…」

「戦っているのは、貴方自身ですよ？」

思わず遮るように言ってしまう。

「う、うるさいー!!」

「それが貴方の治安部を目指す姿勢なのですか？」

「ボクは正義のために治安部のリーダーになるんだ!!」

「それは貴方のお母さんが満足だけだと思わないのですか？」

「…うるさい、うるさい、うるさい!!」

完全に足が止まったロウファに、構えを解いた。

完全にロウファは動揺した。

周囲も戦闘に加わる事もないだろうと思った、その時だった。

「わあああ!!」

ロウファからではなく掛け声が聞こえた。

目視確認に至ろうとした瞬間、自分の両方の二の腕を束縛する圧迫感が襲い掛かる。

ようやくその人物を見ると、それはミクモだった。

彼の東方術『刺す又』が、ちょうど自分の体格と合わさったのだろう。

「むおっ!!」

取り押さえる事に特化した武器が完璧に機能を動きを封じる中、ミクモは言った。

「それでもロウファは、が、頑張ってるんだ!!」

足だけがドタドタとバランスを取る羽目になり、漆黒の魔道士は一気に壁に押し込まれていた。

「ロウファ、今の内に!!」

完全に油断した形で、ミクモを見たながら、一撃は覚悟しようと思ひ、防御本能を強めた。

「余計な事をするな!!」

思わず、ミクモと二人してロウファを見た。

「ボクは実力を証明しないといけないんだ。

お前は余計な事をするな!!

コイツはボクが倒すんだ!!」

そう言われ心なしか、自分を取り押さえていたミクモの力が弱まったような気がした。

『しくん』としてしまい、ため息を出すほど時間が過ぎた事を感じ取ってしまう。

「じゃあ、キミは最大のチャンス逃しましたね…」

最初に反応して振り返ったミクモを、闇が地面にうつぶせるように束縛、啞然としたロウファを立ったまま捕縛した。

「もし、貴方が勝てる可能性があったなら、連携が重要だったと言うのに…」

そのまま地面に落ちた『刺す叉』を拾い上げ、ロウファに突き出す。

それを見たミクモは慌てて、その武器を消したのでミクモを見て言った。

「貴方に治安部のリーダーなんて勤まりませんよ」

まだ、怯えてる初等部の子を見た。

もう動く事はないだろうと、静かになっていると新たな気配がそこにやって来る。

「ふっ、見てられん…な…」

「おや、遅い登場ですね？」

サーベルを右手にレフィーユは歩み寄って来るので、ミクモだけ束縛を解いて軽く羽交い絞めると、周囲を確認するようにレフィーユは聞いて来た。

「随分と派手にやってくれたようだな？」

「偶然ですよ…。」

相手は子供ですからね。

それでも『手加減』はしたつもりなんですが？」

ワザとらしく言うと、レフイーユは微笑みながら聞いて来た。

「それで、見込みのあるような相手はいたのか？」

「どうでしょうね、自分の実力もわからない一人だけが立ち向かって来ただけでしたからね。」

見込みのある人…と言われたら…。

この子くらいでしょうね。

不意打ちとはいえ、良い攻撃をしましたよ？」

羽交い絞めしたミクモを軽く揺さぶると、レフイーユは言った。

「ふっ、お目が高いな。」

なら、その男は助けてもらえないだろうか？

子供には手を出さない。

それはお前のルールでもあるはずだろう？」

すると眼中にないと言われたと思ったのかロウファは言った。

「レフイーユさん、下がってください！！」

「ここはボクが戦います!!」

「下がっている、ロウファ。」

お前の目の前に立っている相手は、お前に手には負えないのが、この一戦でわかっただろう?」

するとロウファは黙り込む、おそらく言い返す文章を教えてもらっているのだろうか、こう答えた。

「:お言葉ですが、レフィーユさん。」

ボクが手合わせをしている時、ボクはレフィーユさんの動きに反応できました。

あの魔道士の時でも、動きに反応できました。

だから、ボクも十分に戦えます。

せめて戦闘に加わらせてください」

「言っておきますけど、私は手加減していると言ってますんですけどか?」

おそらくですが、レフィーユさんも、その時は手加減していると思いますかね」

そう言って、ミクモを解放するついでにロウファも下がらせようとしたが、退く気はないらしく、何度目か肩を竦ませた。

それをレフィューはじっと見ている事に気付いた。

「どうしました？」

「いや、ついお前の役目というのを考えてしまっただけ…。」

難しいものだな？」

ようやくレフィューにじっと睨まれたが決まり手か、ロウファは後ろに下がる。

「ああ、私はつい怒られると思いましたが？」

そのため二人にしか、この会話は聞こえなくなっていた。

「ふっ、どこがだ。」

お前は正しいと思ったからやったのだろう？

どこが責めれる、こんな重要な任務を一人でこなすのだから、私は褒めてやりたいくらいだ」

つい笑ってしまい、空を見上げてしまう。

「じゃあ、見せてあげなければいけませんね。」

貴女の実力がどれほどのモノか？」

「たまには良いのかもな。私のよく知ってる人物は『それが』出来ない男だからな」

そして、静かに微笑む。

「私も、見てみたい…」

相手はサーベルを構え、自分は闇の法衣を被りなおし。

不思議と飛び込むタイミングは一緒だった。

第二十五話

闇の法衣とサーベルが絡み合う。

視線が交差して、お互いは小細工するより自分の得意な距離で戦おうと身体を押し込む。

レフイーユから離れないように、そうはさせないと彼女の攻撃を腕で受け止め、そのまま一步踏み込んで打突、当たるか当たらないは気にせず放つ。

攻撃を小刻みに、武器のない自分にとって手数で勝負する得意なスタイル。

近寄れば近寄るほど有利になるが、一步でも下がれば彼女の得意な距離になるので余裕はない。

レフイーユはそれほど強い。

横に回り、時には身体を捻って無理矢理だが、サーベルを振るう距離を作って応戦する一撃は、重くはないが鋭さを失っていないかった。

「す、すごい…」

ミクモが呟くしかない、こんなうねるような二人の攻防には手助けすら邪魔になる。

「レフイーユさん、距離をとって!!」

ロウファはまるでセコンドのように叫ぶ。

それは例によって得点稼ぎのように聞こえて来るが、実際、その通りだった。

武器を持った相手は密着して戦えば使いモノにならない。

と、昔から言われてるようだが、それは腕に覚えのない人間は試さないだろう。

武器を要する東方術者同士、遠距離が得意な西方術ならなおさら。

しかし武器を持たない自分にとって常勝手段だった。

「ふっ、そこで工夫が必要になる…」

するとレフイーユが、いつの間にやらサーベルをまるで忍者のように逆に構えて攻撃のスピードを上げた。

驚くのは自分だった、先ほどの彼女は攻撃していたとは言え『ころうじて』が付いていた。

しかし、今の彼女の攻撃の手数が格段に増えていたのだ。

武器としてのサーベルは防具と化して、時には攻撃の手段として、攻防一体の性質を帯び。

そして、とうとう潜り込まれ、サーベルを握られた拳で胸を真っ直ぐ突かれ、ふっ飛んでいた。

「すまん、セオリーが通じない相手に対してどう対処すればいいのか教授中のモノでな」

あお向けの自分に、まるで何事もなかったかのようにレフィーユは話しかけて来る。

そのまま法衣に守られているとはいえ、少し痛みの走った胸に手を当てて、少し気になった。

「レフィーユさん、そんな突き、どこで習ったのですか？」

「ふっ、私の目の前に武器を持った相手に、勇敢にも素手で立ち向かう男がいるのでな。」

真似させてもらったのさ」

ロウファが確保しよう近寄ろうとしたが、レフィーユは制するよう言った。

「さて、狸寝入りはここまでだ。」

レクチャーも済んだ事だ、そろそろ本気で掛かって来たらどうだ？」

一瞬で周囲が静まりかえった。

そんな中を構う事無く、レフィーユは地面に散らばった闇の法衣の残り火をサーベルに突き刺して拭うのを見ながら、上半身だけを起こして答えた。

「じゃあ、仕方ありませんね」

レフィューは『ふっ』としたまま、サーベルを構えなおした。

「新技で…行きますか…」

「それは、楽しみだ…」

彼女が神経を尖らせていくのがわかった。

東方術者は付加能力という、厄介な能力があるのだ。

彼女の能力は『残像^{ミラー}』、彼女の残像を見せて相手の攻撃を避け、完全に体勢を崩した相手に向けて重たい一撃を放つという。

シンプルなスタイルだが、実際、けん制代わりに闇を小さく放つと、残像は消えて、彼女の実際にいる距離を間違えてしまっているのだから、どれだけの犯罪者が餌食になったのかわかる。

今、見えている彼女も、もう残像だろう。

呼吸を整え、魔力を上げながら法衣を翻した。

「よいしょっと!!」

残像ごとなぎ払いに来たので、レフィューは一旦、残像に隠れるのをやめ、飛び出てきた。

そこに飛び込み、今度は手だけではなく法衣を使って、彼女に襲

い掛かる。

「ふっ、させるか!!」

今度は彼女の間合いで戦う羽目になる。

「構いませんよ!!」

出来るだけ接近、手刀がサーベルで受け止められようと、

放たれた法衣が切り裂かれ、腕でサーベルを攻撃を受け止めようとも…。

「はああ!!」

軽快に距離を取って、飛び掛る彼女の間合いに…。

なるように一歩、踏み込んだ。

攻撃をするしかない、そんな動きになるように…。

一撃、二撃を避けられ、三撃目を強調するように攻撃を放とうとした時。

『憶測通り』の動きは止まった。

法衣を覆った、真っ黒な男が彼女に覆いかぶさるかのように殴りつける。

いつもの光景、いつもの常勝パターン。

彼女は残像に前のめった、法衣の男目掛けてサーベルを振り下ろす。

「なに!？」

叫んだのはレフィーユだった。

真っ二つに切り裂いた闇の法衣の中には誰もいなかったのだ。

次の瞬間、彼女の今まで叩き伏せてきた犯罪者の感情と、レフィーユの感情は同じようなモノだったのではないだろうかと思った。

構えを解かず、レフィーユをながめたまましばらく動かないでいた。

「…漆黒の魔道士も残像ミラーを使うとは聞いてないぞ？」

「ミラーというより、張りぼてですがね。」

ぶつつけですが、中々、うまくいきましたね」

「ふっ、ぶつつけ本番でここまで出来たのだから、多用は禁止だが実戦投入にしても問題ないだろう」

すると周囲が騒がしくなりだして、レフィーユはゆっくり立ち上がると髪を整えるフリをして通信機を見せた。

「時間が来たようですね？」

「そのようだ」

するとロウファが、勢い良く前に出た。

「もう大人しく降伏しろ、お前は…」

「包囲されているとでも？」

ロウファの影が伸びて彼を、取り押さえ自分は呆れながら答えた。

「あの貴方は、レフィューさんどれだけ不利な状況で戦っていた
と思ったのですか？」

「ど、どういう事だ？」

「私にとっての最善策は人質を取る事なんですが？」

レフィューは、じっと自分を見つめて捕縛されていたロウファに
聞いていた。

「周囲が動けないでいた。」

この男が人質を取る事くらいは想定できたはずだ。

ロウファ、どうして避難させなかった？」

しばらく黙り込む、おそらく母親から指示をもらおうとしたのだ
ろうから、先に答えた。

「先に安全の確保、これはどんな事でも通ずるトコロがあります

よね。

貴方の敗因は、それが出来なかった事でしようが…。

さて、レフィーユさん、これで私を無事に帰さないといけなくなりましたね？」

捕縛したロウファを引き寄せた。

「う、うわ、放せ！！」

ロウファはもがくが拘束を強めた闇はもうビクともしない。

それを宙に浮かせて、レフィーユに見せしているとロウファを見ながら言った。

「ふっ、私はお前を逃がさないといつ言った？」

「おや、逃がすとは珍しい事もありますね」

「その代わり、ロウファを放してもらおう。

これでも治安部の未来を担う若手だからな」

そう言って、髪をかき揚げサーベルを消したので、ロウファもゆっくり降ろされる事で理解したのだろう。

自分達の敗北を…。

第二十六話

「我々の邪魔をするのは、いい加減にしてくださいだこう!!」

学園に帰って来るなり、レフィーユの怒声が響くが、しかし、モンスター達、ミチコも黙っていない。

「親が自分の子供を信頼して、何が悪いザマス!!」

いい加減にするのは、そちらの方じゃございません事!？」

「その結果が、先ほどの結果だ!!」

「でしたら、次に期待して欲しいザマスわ!!」

ロウファちゃんだけじゃない、今度は皆さまのお子様も活躍しますわ!!」

ミチコは振り返って、その他、保護者一同、いや、モンスター達に同意を求める。

それが何の号令だったのか騒がしくなって言った。

「そうよ、今度はシンヤちゃんだって、やれるハズよ」

「ネムも、きっとお宅のロウファちゃんの役にたてますわ」

「いやですわ、奥様」

子供を盾に社交辞令の飛び交うなか、レフィーユは…。

バンッ！！

思い切り机を叩いて言った。

「下手すれば怪我ではすまない事だってある、思い上がるな！！」

一喝され、保護者一同は怯むがまだこう答えるモノもいた。

「私は昔、治安部でしたけど、その頃は、もう少し無茶な事もやらせていたわ」

「そ、そうですわ、まるでレフィーユさん、あなたが大袈裟すぎるだけなのでは？」

周囲がその保護者の意見に頷き「そうよ」と連呼が始まりですが、レフィーユはそれに静かに答えた。

「確かにわからなくもない。

だがな、お前たちの時代にはスーパーペインはいたか？

確かに時代が違うと言いたいのはわかる…」

保護者を睨み付けるように見えるが、レフィーユは顔を曇らせて答える。

「スーパーペインだけではない…。

現在、この町には漆黒の魔道士だっている。

ペインの部下であるファミリー達、その他、犯罪者。

：現に指名手配犯である漆黒の魔道士に襲われ、いつでも倒せただろうに手加減されて見逃された。

それが事がどういう事なのか、何故わからん…」

ようやく終わった治安部室は、すでに他の部員を下がらせていたせいか自然と静かになった。

コンコン…。

そんな中を、ノックが鳴り響いてドアを開ける人物がいた。

「すいません、自室で料理をしていましたら、包丁で手を切ってしまいました」

「医務室に行ってほしいモノだな…おや？」

するとレフィーユはわざとらしく自分の軽く切れた傷口を見て、切った方向から切れた方向を指先でなぞりながら言う。

「逆さに切れている…。

お前は包丁を逆さに握って、料理をするのか？」

そして、レフィーユはその指を見ながらこうも言った。

「ふっ、なるほど、その隠ぺい工作の過程で、料理がうまくなるワケか…」

「出来なかったら、ごまかせませんからね」

そういうとレフイーユは微笑んで、救急箱を取り出しながら言った。

「すまない、手間をかけさせたな」

「まあ、あんな事態になるのは予想は出来たとはいえ、モンスター達の動きを少し上手だったという事でしょうかね。」

確かに貴女は、学園にも警察にも口止めをしてました。

ですが、いざ事件発生した途端に、警察から避難目的で情報を仕入れて来ましたからね。

一般人を装って行動なら警察もまず教えないといけませんから、警察としては迷ったのでしょうか…」

「警察も市民の安全が義務だからな。」

そして、それを知ったお前は、出撃して今に至るという事か…。

ふっ、認めたくはないが、少し悔りすぎたようだ」

「まあ、問題はその後だった。」

とは、思いもありませんでしたがね」

「何か問題があったのか？」

「さっきあのモンスター達の一団を見かけましてね」

「ふっ、一団か…。」

何か言われたのか、別に気にする事はないだろう？」

消毒液を取り出し、それを軽く『ブシュ』とさせて聞いてみた。

「誰も見てないと思って、出入り口付近で子供に向かって説教ですよ」

似てないモノマネをしているとレフィーユはため息をついた。

「反省の色もなし…か…」

キンコーン…♪

チャイムが鳴った。

それは仕切りなおすように授業の開始を伝える予鈴、この後、10分後に授業は再開した。

第二十七話

その時間、レフィーユは授業の中で治安部の教本を読み解いていた。

「大きな犯罪組織には、様々な構成員がいるように、重要な犯罪者の周りというのは自然に取り巻きが出来てしまう傾向がある。

交友関係という概念もあるが、用途は様々だ。

名を上げようとその人物に近寄り、犯罪に加担しようとするモノ、快樂目的、多くは損得勘定で成り立った関係が多い。

だが、治安部の活動というのは、これら全てを相手にした上で、なおかつ治安を維持しなければならない」

そう言って、レフィーユは初等部の方を向いてロウファに聞いてみた。

「治安とは何だ？」

「はい、地域、社会の秩序が保たれて穏やかな状態の事を言います」

まるで辞書にあるような解答を見せ、自信満々のロウファだったのだが、彼女はずっとロウファを見ていた。

「レフィーユさん？」

この後も、授業を続ける事になるのだが、レフィーユの顔色は晴れる事なかった。

そして…。

「おい？」

「なんだ？」

「こっちはよ、飯時なんだ。やめてくれねえか？」

ようやく、その曇り空に対し指摘したのはスーパーペインだった。

「一応、楽しみにしてたんだぜ。」

しゃべれる事なんか中々、無えんだからよ。

おい、食事係の、何かあったのか？」

レフィーユは黙ったままだったが、ペインは自分に言った。

「まあ、何となくだが。」

どうせ聞き分けのないガキをどうすれば良いか考えていたんだろう？」

「その通りですよ、元治安部として何か良い方法はありますかね？」

ペインの背後で姉と一緒にいたセルフィは相変わらぬ表情を自分を見たが、ペインはじっと自分を見ながら答えた。

「まあ、経験上だが、正直、やべえな」

「やばいとは？」

「はっきり言って、ノイローゼに近い。」

『自分は規則正しくやってる。』

だから自分のいう事、やる事全てが正しい』

そう『思い込んで』生きて来たんだろう。

そんな思い込みを突き崩す事、事態が、まず無理だ…」

「ふん、それをアンタだったら、どうするのか聞いているのよ？」

セルフィは構えを解かず聞いて来るが、ペインはあっさり答えた。

「放っておく…」

セルフィは背後に立ったままだったが、その戸惑いを感じたのだろう。

ペインはため息をついて言った。

「言っとくがな、それが正解だと思うぜ。」

そいつには会った事がねえが、要するによ、自分を形成する型つてのが出来上がってんだ。

人間形成って意味じゃねえ。

敷き詰め状態で、ストレスをガスとも感じないで受け入れて型が出来上がってんだ。

上手、下手にだろうが刺激を与えたら、どうなるのがわかったモンじゃねえ。

明らかに壊れるのが目に見えてんだ…。

こうなったら治安部の仕事じゃねえ、医者の仕事だ」

「だから、放っておくか…」

さすがに元治安部のリーダーという見解だったのか、レフィューは感心するように呟く。

そしてペインは何故か笑っていた。

ちやうどそれが自分にしか見えなかったが、ペインはどう思ったのか向かい合った自分に一旦、謝ってこう言う。

「元治安部なんて言ってるが、犯罪者の俺がこう現役治安部、しかもレフィュー・アルマフィだ。

それにアドバイスをしている、それがおかしくてな。

人生、どうなるかわかったモンじゃねえと思ってな」

ペインは悪態をついたが、レフィーユはジョークだとわかっているのだろう。

それに微笑んでいたので聞いてみた。

「やっぱりレフィーユさんって、有名なんですか？」

「まあな、俺はもう犯罪者こんなのになっていたが、凄いヤツだったのは俺の地元まで届いていた。

どんな鉄の女なんだろうと思いましたが…。

実際、こう会って見ると、凄いのがわかるんだよ。

規則正しいと思えば、こうやってしゃべれる機会も作る。

完璧なのかと思えば、治安部のリーダーなら誰でも避けるような難題に真正面から向かい合って、そして、悩む。

俺なんか、足元にも及ばねえよ」

自分の治安部時代の事を思い浮かべているのだろうか、つい聞いてしまった。

「どんな治安部だったのですか？」

「普通だよ、さっき言ったようにアンタらには、足元にも及ばねえ…。

ただ成果を上げようと、必死になっていたリーダーがそこにいただけだ。

必死だから、周りも見えねえ。

ただの点取り虫。

気が付いたら、周りには誰もいなかった。

そんな治安部さ」

「そんな事はないでしょう。

貴方にも、心配してくれる人くらいいたでしょう？」

「…それは甘い考えだな。

そんなヤツ『いた』かもしれねえよ。

でもな、俺は周りなんて何も見えなかったんだ。

多分よ、そのガキも同じだ。何も見えてなんかいいえんだ。

成果を上げようと必死になっている」

ペインはそのまま黙り食事をずっと続けていた。

いつもの調子ではない。まるで、昔を飲み込もうとしているように自分には見えたが、ペインは言った。

「心配はいらねえよ。」

多分よ、そいつ等の中にきつとアンタらのような考えを持っているヤツがいる。

絶対にな…」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4304u/>

荒んだ世の中での愉快的学園生活 3rd

2011年11月22日15時44分発行